# イスに関する調査研究 2020 年度報告書



2021年3月 公益財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金

## 目 次

第1章	調査の前提と調査概要	
はじめに		1
第1節	新型コロナウイルス感染症流行を踏まえたユニバーサルスポーツの取組	
	藤田紀昭(日本福祉大学スポーツ科学部学部長)	2
第2節	調査・研究の目的	
第3節	調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
第2章	調査結果	
第1節	調査結果の単純集計	8
第3章	要点の整理	
第1節	要点の整理	25
第2節	要点の比較	27
第3節	コラム「新型コロナウイルス流行下における障害者スポーツの取り込み」	
	金山 千広(立命館大学産業社会学部教授)	35
第4章	課題と提言	
第1節	ユニバーサルスポーツに関わる障壁	37
第2節	今後の方策	40
第3節	コラム「オンラインによるスポーツ・運動指導の取り組み	
	林田 はるみ (桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部教授)	42
第5章	新型コロナウイルス感染症対策プログラムの試行	•
第1節	実施経過 ·····	
第2節	実施概要 ·····	44
第3節	実施内容	45
第4節	コラム「コロナ禍におけるユニバーサルスポーツの開発	
	兒玉 友 (日本福祉大学スポーツ科学部助教)	47
第5節	要点と課題	49



### **∥はじめに**

私たちは、1981年に国連が提唱し実施された「国際障害者年」のテーマである「完全参加と平等」の実現を目指し、スポーツや芸術などの分野で、障害の有無に関わらず共に体験しながら交流する活動を実施してまいりました。とりわけ 1981年にスタートした「ふれあいのスポーツ広場」と題した事業は、段階的に活動を充実強化し、2019年度には全国45会場 14,669名の皆様にご参加をいただいています。

また、開催が予定されている東京でのパラリンピック競技大会に向け、障害のある方のスポーツへの 取組が紹介されることが多くなり、障害の有無に関わらず楽しむことのできる「ユニバーサルスポーツ」 も広く浸透して参りました。

このような状況を踏まえ、2019 年度からはじめた「ユニバーサルスポーツの普及に関する調査研究」 と題した調査は、初年度として各地の取組の事例を行っている団体への訪問調査を行い、その活動のきっかけやスポーツの内容、協力団体の状況、現状での課題などを聞き取り、共通する要点を明らかにするべく実施し、報告書としてまとめることができました。

2020年度には、地域を基盤とした社会参加のためのユニバーサルスポーツの実例と障害福祉サービス事業所との連携の状況を明らかにすることを目的として、障害福祉サービス事業を主な対象として web によるアンケート調査を実施いたしました。障害のある方にとって、大きな社会資源である障害福祉サービス事業所の取組の現状と課題を整理し、地域におけるスポーツを通じた取組の拡がりを求めて、この報告書をまとめました。

一方では、2020年はじめから猛威を振るっている、新型コロナウイルス感染症により、2020年度には私たちの活動も大きな影響を受け「ふれあいのスポーツ広場」の開催を断念せざるを得ない状況となりました。障害者スポーツの分野でも、各地の取組が大きく縮小しています。長い年月をかけて積み重ねられてきた取組をどのような形で継続していけるのか、その取組のきっかけとして、私たちはモデルプログラムの研究も併せて行いました。

福祉領域の活動が、お互いの距離を詰めていく活動として取り組まれてきた中で、人との距離を保つ という感染症対策との両立をいかに目指していくのかを考える一助にしていただければ幸いです。

最後に感染症対策などでお忙しい中をアンケートにご協力をいただきました障害福祉サービス事業所の皆様、告知にご協力をいただいた全国手をつなぐ育成会連合会の皆様、この研究に助成をいただいた、 (福)黎明会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

2021年3月

公益財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金

## 第1章 調査の前提と調査概要

#### 第 1 節 新型コロナウィルス流行を踏まえたユニバーサルスポーツの取組

#### 藤田紀昭 日本福祉大学スポーツ科学部長・教授

#### 1 障害者施設での運動やスポーツの実施状況と課題

本研究グループでは昨年度、「ユニバーサルスポーツの普及に関する調査研究」として、障害者も参加できる運動・スポーツプログラムを提供している 11 の団体にインタビュー調査を実施した。これらの団体が提供しているプログラムには様々な特徴を持った人々に対応できるよう柔軟に競技ルールを運用していること<適合性>、プログラムに参加する人たちの属性や身体的条件を問わない<多様性>、手に入りやすく、安価な道具を利用するという<経済性>、そして、勝敗のある競技では、参加者みんなに勝つチャンスが保障されているという<機会均等>の4つの特徴があることを報告した。さらにこうした特徴を持つユニバーサルスポーツを展開するために、プログラムを提供する組織においては様々な意見が取り上げられるようボトムアップ式の取り組みや、身近な地域にある場を拠点とした取り組みが求められることを指摘した。さらに、限られた資源を有効に用いてプログラムを実施できるようにするため、専門的な事柄と共有できる事柄を整理し、共有できることは協働で対処すべきことや障がいの有無に関係なく、より多くの人に参加を呼びかけていくことを提言した。

昨年度の結果を受け、今年度は全国の障害者関連施設における運動・スポーツプログラムの実施状況の実態を明らかにするためのアンケート調査を実施した。加えて、これらのプログラム実施に対して新型コロナウィルスの感染拡大がどのような影響を与えたかについても調査を行った。

詳しい結果はこの後の報告に譲るが、多くの障害者施設において利用者交流のための旅行やバザー、音楽演奏など各種芸術活動、施設内外での運動やスポーツ活動、スポーツ大会への参加が行われていることがわかった。運動・スポーツに関して言えば、それほど専門的な知識や経験を必要としないウォーキングや体操(ヨガを含む)などを実施しているところが多かった。運動・スポーツ実施に際しては職員やボランティア、指導者などのマンパワーが不足していることが課題となっていた。そして、実施に際して他組織など外部資源を利用しているところは少ないことが明らかになった。

多くの障害者施設においては専門的知識を持った指導者や実施に関わるマンパワーが不足していることから、身体を動かすことの楽しさや自己実現を目的とするというよりは少ないスタッフでも可能な健康や体力維持を目的としたものを苦労しつつ実施していることが推測できる。また、そのためやれる競技や種目にも広がりが見られないことが考えられる。

#### 2 ユニバーサルスポーツの効用

<適合性><多様性><経済性><機会均等性>といった特徴を持ったユニバーサルスポーツは、障害者施設におけるレクリエーションプログラムとして有用なものと考えられる。ユニバーサルスポーツは<適合性><多様性>という特徴があり、人それぞれ動きに様々な制限がある障害のある人に対応することが可能であることである。障害のない人も一緒に参加できることから施設職員やボランティアも一緒に楽しむことができる。地域の人との交流のプログラムとしてもふさわしいと考えられる。また、<経済性>という特徴を持ったユニバーサルスポーツは運動やスポーツのために多くの予算を費やすことができない施設においても実施可能と思われる。

課題はそうしたプログラムについての情報や実施方法に関する情報がないこと、指導できる人材がいないことである。今年度の調査から運動・スポーツを実施する際に、施設外の組織や人たちに協力を求めているところが少ないことが明らかになった。障害者スポーツ指導員資格を持った人やユニバーサルスポーツについての知識やノウハウを持った人に支援してもらえるようになれば障害者施設での運動・スポーツプログラムがバラエティになり、施設利用者の楽しみにも幅ができる。こうした人材の養成や派遣、情報の提供は今後の課題である。

#### 3 新型コロナウィルス感染拡大による影響

2020 年は歴史に残る1年と言ってよいであろう。各障害者施設も新型コロナウィルス感染拡大様々な影響を被っている。例えば施設内で利用者の交流を目的とした運動・スポーツプログラムを実施していると答えた151の施設のうち実施を見合わせたところが119施設あった。他のプログラムも軒並み中止あるいは延期となったと考えられる。こうした状況下で、各種施設の職員のみなさんは苦労と不安の中で利用者に少しでも楽しんでもらえるようなプログラムを提供していたに違いない。

このような環境は私たちすべてにとって初めての経験であり、感染防止のためプログラムを見合わせざるを得なかったことは致し方ない。しかし、どのようにすれば感染が防止できるかという知識も蓄積されつつある。スポーツ界では各種競技団体がスポーツ実施に際しての感染防止ガイドラインを出している。今後はウィルスに対する正しい知識を持ち、正しく恐れ、正しい感染予防策をとって運動やスポーツを楽しむことが求められるであろう。障害者施設などにおいて実施する競技もこれまでと同じものを同じように実施するということではなく、構造的に、密になることを避けられるようなプログラムを感染予防対策を十分行って実施することが必要となる。

ナイスハート基金ふれあいのスポーツ広場ではそうした新しい競技を考案し、感染防止策を施したうえで動き出そうとしている。これについてもこの後の報告の中で詳しく触れることになっている。

#### 4 今後に向けて

障害者施設で実施されている運動やスポーツの種類に幅を持たせ、そこで時間を過ごす障害のある人や様々な支援者の活動を豊かにするためにユニバーサルスポーツは大きな可能性を持っている。そしてウィズコロナという状況を考えると求められているのは「感染しにくい構造を持ったユニバーサルスポーツ」である。こうした競技を開発し実施することのハードルは高いが必要は発明の母である。知恵を絞ってこうしたスポーツを開発していかなくてはならない。加えてそうしたスポーツを普及指導できる人、あるいはそうしたスポーツの作り方を指導できる人が求められる。こうした人を直接養成するだけでなく、2020年急速に普及したライブリモートによる情報提供、オンデマンドによる情報提供することで施設の職員や様々な指導者に情報提供していくことも可能であろう。ライブリモートやオンデマンドによる指導についても本報告書で触れられている。こんな時代だからこそ知恵を絞って、様々な人が一緒になって

安全に楽しめる機会をできるだけたくさん設けたい。「障害のあるなしにかかわらず、全ての人々がよりよい社会づくりのために協働し、ナイスハート(心のふれあい)の輪を広めるための事業を行い、障害者の福祉の増進及び共生社会の実現に寄与することを目的としたナイスハート基金にふさわしい課題である。

最後に昨年度の調査報告書の言葉を再掲して本項の終わりとしたい。「一緒にいる人と共に楽しめる スポーツがあれば介助者は介助者であると同時にスポーツへ参加者となることがでる。

さらに、一緒に楽しめるスポーツがあれば介助者が必要な障害者のスポーツ参加もしやすくなるはずである。つまり、一緒に楽しめることで障害者がスポーツを実施しやすくなり、その実施率も上がる可能性がある。そしてなにより、障害のある人と無い人が互いに理解を深め、共生社会の実現へとつながるはずである。」

#### 第2節 調査・研究目的・調査方法

当基金の設立目的である、よりよい社会づくりのために協働し共生社会づくりへの一助とするため、 障害福祉サービス事業所及びユニバーサルスポーツの提供団体と連携し、障害の有無に関わらず行う ことのできるスポーツプログラムの充実に寄与することを目的に、この研究を実施する。

- (1) 障害福祉サービス事業所におけるユニバーサルスポーツの取組の状況を明らかにする。
- (2) 地域を基盤とした、社会参加のためのユニバーサルスポーツの実例と障害福祉サービス事業所との連携の状況を明らかにする。

#### (1) 実施主体

公益財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金及び有識者による研究会

藤田 紀昭さん 日本福祉大学スポーツ科学部長・教授

金山 千広さん 立命館大学産業社会学部教授

林田 はるみさん 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部教授

#### (2) 協力

一般社団法人全国手をつなぐ育成会連合会

#### (3) 助成

社会福祉法人黎明会 福祉開発振興援助事業

#### (2)調査・研究の期間

2年間 2019年度~2020年度

2019 年度 各地のユニバーサルスポーツを行っている団体への訪問調査

2020年度 障害福祉サービス事業所に対するアンケート調査

#### (3) 新型コロナウイルス感染症流行への対応

2020年を通じて流行していた新型コロナウイルス感染症の影響と、ユニバーサルスポーツへの影響を考察するため、調査項目に新型コロナウイルス感染症への対応などを追加すると共に、安全で安心なプログラム開発と運営についてのモデルプランを提示するために、2020年11月30日に仙台市において、リハーサル大会と題したプログラムを試行した。

#### 第3節 調査方法

#### (1) 調査方法

無記名式のインターネット調査。

当基金 web ページ上に作成した。

https://niceheart.or.jp/?p=1671

#### (2) 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- 1. 施設・団体について
- ・施設・団体の基本的な属性
- ・施設・団体の規模
- ・提供サービスの内容
- 2. サービス利用者について
- ・利用者の基本的な属性
- 3. レクリエーション活動について
- ・実施しているレクリエーション活動の内容
- ・新型コロナウイルス感染症の影響
- ・スポーツの実施、運営
- 4. ユニバーサルスポーツについて

#### (3) 調査対象及び回収結果

当基金が把握している障害者団体、障害福祉サービス事業所に e-mail にて送付したほか、全国手をつなぐ育成会連合会に協力を要請。236 件の回答を得た。

## 第2章 調査結果

#### 第1節 調査結果の単純集計

ここでは、質問に対する回答を単純に集計したものを示す。また障害福祉サービス事業所の属性について、厚生労働省による令和元年社会福祉施設等調査及び令和元年障害福祉サービス等経営概況調査結果を比較材料として参照している。

https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/19/index.html https://www.mhlw.go.jp/houdou/2020/01/h0117-01.html

#### (1) 障害福祉サービス事業所の属性

#### 問 1-1 貴団体の活動している都道府県についてお答えください

都道府県	回答数	率	都道府県	回答数	率
北海道	6	2.5%	滋賀県	4	1.7%
青森県	14	5.9%	京都府	2	0.8%
岩手県	2	0.8%	大阪府	9	3.8%
宮城県	6	2.5%	兵庫県	14	5.9%
秋田県	5	2.1%	奈良県	4	1.7%
山形県	2	0.8%	和歌山県	5	2.1%
福島県	4	1.7%	鳥取県	0	0.0%
茨城県	1	0.4%	島根県	2	0.8%
栃木県	6	2.5%	岡山県	4	1.7%
群馬県	6	2.5%	広島県	4	1.7%
埼玉県	4	1.7%	山口県	4	1.7%
千葉県	5	2.1%	徳島県	7	3.0%
東京都	8	3.4%	香川県	5	2.1%
神奈川県	6	2.5%	愛媛県	0	0.0%
新潟県	5	2.1%	高知県	1	0.4%
富山県	2	0.8%	福岡県	15	6.4%
石川県	6	2.5%	佐賀県	6	2.5%
福井県	1	0.4%	長崎県	2	0.8%
山梨県	4	1.7%	熊本県	5	2.1%
長野県	5	2.1%	大分県	3	1.3%
岐阜県	3	1.3%	宮崎県	2	0.8%
静岡県	4	1.7%	鹿児島県	3	1.3%
愛知県	4	1.7%	沖縄県	9	3.8%
三重県	4	1.7%	不明 /NA	13	5.5%
	合	計		236	100.0%

ふれあいのスポーツ広場を全国各地で実施しており、満遍なく回答が得られた。

問 1-1 の都道府県は、「福岡県」 (6.4%) が一番多く、次いで「青森県」 (5.9%)・「兵庫県」 (5.9%) と同数で 2 番目に多かった。 「鳥取県」 と「愛媛県」 はゼロ回答だった。

問 1-2 貴団体の施設・団体のサービス種別についてお答えください(複数回答) n = 236

	サービス種別	回答数	率
	居宅介護(ホームヘルプ)	17	7.2%
	重度訪問介護	17	7.2%
	同行援護	5	2.1%
	行動援護	11	4.7%
  介護給付	重度障害者等包括支援	0	0.0%
八 最和 N	短期入所 (ショートステイ)	37	15.7%
	療養介護	1	0.4%
	生活介護	138	58.5%
	施設入所支援	36	15.3%
	共同生活援助(グループホーム)	52	22.0%
	自立訓練(機能訓練・生活訓練)	10	4.2%
訓練等給付	就労移行支援	31	13.1%
	就労継続支援(A型、B型)	149	63.1%
地域生活支援事業	地域活動支援センター	19	8.1%
地场工力义阪尹禾	福祉ホーム	2	0.8%
	その他	33	14.0%

厚生労働省が実施している令和元年障害福祉サービス等経営概況調査結果と比較して、障害者施設に特化した調査であること、スポーツに関わる調査であることから、居宅、援護系のサービスを実施している事業所からの回答は少なく、その他のサービス実施事業所はほぼ同等の回答が得られた。

問1-2のサービス種別は、「就労継続支援(A型、B型)」(63.1%)と生活介護(58.5%)が多かった。厚生労働省が実施している「令和元年社会福祉施設調査の概況」表4(事業の種類別にみた事業所数)では、「居宅介護事業」(23098事業所)・「重度訪問介護事業」(20789事業所)が最も多いが、アンケートではどちらも17回答(7.2%)と少なかった。

問 1-3 貴団体の設立年月について

設立年	回答数	率	設立年	回答数	率
~ 1980 年	40	16.9%	2001 ~ 2005 年	50	21.2%
1981 ~ 1985 年	11	4.7%	2006 ~ 2010 年	38	16.1%
1986 ~ 1990 年	21	8.9%	2011 ~ 2015 年	22	9.3%
1991 ~ 1995 年	17	7.2%	2016年~2020年	3	1.3%
1996 ~ 2000 年	22	9.3%	不明 /NA	12	5.1%

問 1-3 の設立年月は、「2001 ~ 2005 年」 (9.3%) が最も多く、次いで 「1980 年以前」 (16.9%) が多かった。

問 1-4 貴団体の法人格等について

法人格等	回答数	率	法人格等	回答数	率
社会福祉法人	143	60.6%	協同組合等	0	0.0%
公益社団法人	1	0.4%	合同会社	0	0.0%
公益財団法人	0	0.0%	合資会社	1	0.4%
一般社団法人	7	3.0%	株式会社	1	0.4%
一般財団法人	0	0.0%	有限会社	0	0.0%
特定非営利活動法人	70	29.7%	その他	4	1.7%
			不明 /NA	9	3.8%

問 1-2 で参照した、令和元年障害福祉サービス等経営概況調査結果と比較して、営利法人の割合が低くなっている。これは居宅、援護系のサービスを実施している事業所の回答が少ないためと考えられる。

問 1-4 の法人格は、「社会福祉法人」(60.6%)が圧倒的に多く、次に「特定非営利活動法人」(29.7%)が続き、その2つの法人で90%を占めた。

#### 問 1-5 貴団体の職員数について

職員数	回答数	率
~ 10 人	62	26.3%
11~30人	78	33.1%
31~100人	53	22.5%
101~1000人	23	9.7%
1001 人~	2	0.8%
不明 (無回答)	18	7.6%
合計	236	100.0%

問 1-5 の職員数は、「11 ~ 30 人」(33.1%) が最多回答で、次いで 10 人以下(26.3%)、31 ~ 100 人(22.5%) が多かった。

#### 問 1-6 貴団体の活動内容について(複数回答)

n = 236

活動内容	回答数	率
理学療法、作業療法その他必要なリハビリテーション	14	5.9%
利用者の適性に応じた職場の開拓	46	19.5%
入浴、排せつ、食事等の介助	131	55.5%
調理、洗濯、掃除等の家事	52	22.0%
創作的活動、生産活動の機会の提供	148	62.7%
生産活動その他の活動の機会の提供	149	63.1%
生産活動、職場体験その他の活動の機会の提供を通		
じて行う、就労に必要な知識及び能力の向上のために	98	41.5%
必要な訓練		
生活等に関する相談、助言	130	55.1%
生活訓練	68	28.8%
身体機能や生活能力の向上のために必要な援助	91	38.6%
就労に必要な知識および能力の向上のために必要な訓練	112	47.5%
就職後における職場への定着のために必要な相談や支援	41	17.4%
求職活動に関する支援	43	18.2%
機能訓練、療養上の管理、看護	20	8.5%
その他日常生活上の支援	124	52.5%

生活援助、就労支援を中心とした事業所の回答が多かったため、それらの事業所が提供しているサービスが多くなっている。

問 1-6 の活動内容は、「生産活動その他の活動の機会の提供」(63.1%)と「創作的活動、生産活動の機会の提供」(62.7%)が多かった。

#### (2) 利用者について

問 2-1 貴団体のサービスを利用されておられる方について(複数回答)

n = 236

障害種別	回答数	率	障害種別	回答数	率
視覚障害	54	22.9%	精神障害	153	64.8%
発達障害	97	41.1%	肢体不自由	124	52.5%
聴覚障害	47	19.9%	高次脳機能障害	44	18.6%
知的障害	220	93.2%	内部障害	31	13.1%
言語障害	34	14.4%	その他	11	4.7%

知的障害のある方が多数を占め、他の障害種別が続いている。視覚、聴覚の障害がある方が想像 以上の利用者と感じている。

問 2-1 の障害種別は、「知的障害」(93.2%) が最も多く、次いで精神障害(64.8%)・肢体不自由(52.5%)であった。

問 2-2-1 貴団体のサービスの利用者数について

利用者数	回答数	率
~ 10 人	16	6.8%
11~30人	85	36.0%
31~100人	97	41.1%
101~1000人	21	8.9%
1001 人~	3	1.3%
不明(無回答)	14	5.9%
合計	236	100.0%

問 2-2-1 の利用者数は、「 $31 \sim 100$  人」(41.1%)と「 $11 \sim 30$  人」(36.0%)が多かった。 問 2-2-2 利用者の障害種別割合

n=236

障害種別	1 ~ 20%	21 ~ 40%	41 ~ 60%	61 ~ 80%	81 ~ 100%
視覚障害	49(20.76%)	0	0	0	0
発達障害	67(28.39%)	15(6.36%)	1(0.42%)	0	2(0.85%)
聴覚障害	41(17.37%)	0	0	0	0
知的障害	30(12.71%)	15(6.36%)	18(7.63%)	30(12.71%)	121(51.27%)
言語障害	27(11.44%)	1(0.42%)	1(0.42%)	0	0
精神障害	114(48.31%)	15)6.36%)	10(4.24%)	5(2.12%)	4(1.69%)
肢体不自由	87(36.86%)	16(6.78%)	4(1.69%)	5(2.12%)	5(2.12%)
高次脳機能障害	35(14.83%)	1(0.42%)	0	0	0
内部障害	25(10.59%)	1(0.42%)	0	0	0
その他	8(3.39%)	0	1(0.42%)	1(0.42%)	0

問 2-2-2 の障害種別割合は、知的障害の「 $81 \sim 100\%$ 」の割合の回答(121)が最も多かった。また、「 $1 \sim 20\%$ 」の割合の回答が、知的障害を除く全ての障害種別で多かった。

#### 問 2-3 利用者の年齢割合

n=236

障害種別	1 ~ 20%	21 ~ 40%	41 ~ 60%	61 ~ 80%	81 ~ 100%
20 歳未満	90(38.14%)	5(2.12%)	0	2(0.85%)	2(0.85%)
20 代	114(48.31%)	50(21.19%)	12(5.08%)	7(2.97%)	3(1.27%)
30 代	111(47.03%)	68(28.81%)	14(5.93%)	6(2.54%)	0
40 代	113(47.88%)	68(28.81%)	12(5.08%)	3(1.27%)	0
50 代	143(60.59%)	40(16.95%)	2(0.85%)	1(0.42%)	0
60 代	121(51.27%)	19(8.05%)	2(0.85%)	1(0.42%)	0
70 代以上	78(33.05%)	4(1.69%)	1(0.42%)	1(0.42%)	1(0.42%)

問 2-3 の年齢の割合では、最も回答数が多かったのが、「50代」の「 $1 \sim 20$ %」の割合 (143) であった。また、全ての年代で「 $1 \sim 20$ %」の割合の回答が多かった。

#### (3) レクリエーション活動・行事について

問 3-1 実施しているレクリエーション活動(複数回答) n = 229

	レクリエーション活動	回答数	率
	行っていない	8	3.5%
	宿泊を伴う旅行・キャンプ	89	38.9%
	宿泊を伴わない旅行・遠足	170	74.2%
利用者交流	利用者間の交流会	136	59.4%
	バザー・お祭りなどのイベントの開催	155	67.7%
	地域で開催される行事への参加	157	68.6%
	観劇・音楽鑑賞等	91	39.7%
  文化活動	カラオケ大会	108	47.2%
人儿心到	音楽演奏	57	24.9%
	絵画・書画・クラフト等	97	42.4%
	利用者間の交流を目的とした運動やスポーツ	151	65.9%
運動やスポーツ	地域住民などとの交流を目的とした運動やスポーツ	42	18.3%
	利用者を対象にした運動やスポーツ教室	103	45.0%
	競技大会などへの指導者・選手の派遣	47	20.5%
	その他	13	5.7%

問 3-1 の実施しているレクレーション活動は、「宿泊を伴わない旅行・遠足」(74.2%)が最多回答で、次いで「地域で開催される行事への参加」(68.6%)・「バザー・お祭りなどのイベントの開催」(67.7%)・「利用者間の交流を目的とした運動やスポーツ」(65.9%)が僅差で続いた。

問 3-2-1 今年流行をした新型コロナウイルス感染症の影響により、施設内外を問わず実施を見合わせた行事(複数回答)

n=221

	レクリエーション活動	回答数	率	見合わせ た比率
	宿泊を伴う旅行・キャンプ	80	36.2%	90%
	宿泊を伴わない旅行・遠足	147	64.2%	86%
利用者交流	利用者間の交流会	95	41.5%	70%
	バザー・お祭りなどのイベントの開催	145	63.3%	94%
	地域で開催される行事への参加	146	63.8%	93%
	観劇・音楽鑑賞等	77	33.6%	85%
サル 江利	カラオケ大会	84	36.7%	78%
文化活動	音楽演奏	39	17.0%	68%
	絵画・書画・クラフト等	25	10.9%	26%
	利用者間の交流を目的とした運動やスポーツ	119	52.0%	79%
運動やスポーツ	地域住民などとの交流を目的とした運動やスポーツ	42	19.0%	100%
	利用者を対象にした運動やスポーツ教室	74	32.3%	72%
	競技大会などへの指導者・選手の派遣	43	18.8%	91%
	その他	12	5.2%	92%

問 3-2-1 の新型コロナウイルス感染症の影響により見合わせたレクレーション活動は、「宿泊を伴わない旅行・遠足」(64.2%)・「地域で開催される行事への参加」(63.8%)・「バザー・お祭りなどのイベントの開催」(63.3%)が 3-1 の回答と同じく上位を占めた。「利用者間の交流を目的とした運動やスポーツ」(52.0%)は、3-1 の回答(65.9%)に比べて、割合が低かったことから、他の活動より新型コロナウイルス感染症の影響を受けずに実施できた活動が多かったと言えるだろう。

問 3-2-2 行事の開催を見合わせことによる利用者への影響

影響	回答数	率
あった	137	63.7%
なかった	27	12.6%
どちらでもない	50	23.3%
不明 (無回答)	1	0.5%
合計	215	100.0%

問 3-2-2 の見合わせたことによる影響は、「あった」(63.7%)が圧倒的に多かった。

#### 問 3-2-3 具体的にはどのような影響がありましたか

#### ※記述式の回答は主なものになります

	の自古は上なりのになり	
心理的影響	ストレス・イライラ・不満	ストレスにより入院した方も。
		日常的に「イライラ感」が、言葉やしぐさに現れるようになってきてる傾
		向がみられる。
		個々にストレス等みられた。(感情起伏差、大声発する等)
		同行支援でカラオケなどが行けなくなりイライラしたり、大声をしたり、
		不満を訴える利用者がいた。
	モチベーションの低下	イベントをモチベーションにされている方も多いため、覇気がなくなった。
		年1回だけの行事がなくなりまたお出かけや交流会が減り元気がなくな
		りました。
		利用者の外出機会が減り、自分達で作ったものを、イベント等に販売し
		ていたが、それが出来なくなり、利用者さんの仕事が減り、又販売の
		意欲も失いかけている。
	情緒不安定・不安	年間行事・スケジュールの変更で情緒面が不安定になってしまい自粛
	旧相17女是 17女	
		中も気持ちが落ち着かないことがおおかった。
		過去数年間楽しみにしていた行事でもあったため、気持ちの落ち込み
		や今後への不安等が強く訴えられています。
	Th A 181	活動が再開できるか不安を感じている。
	残念・元気がない	楽しみにしていた行事がなくなって、がっかりしていた。
		残念、寂しいという声が多く上がった。楽しみな事業が中止になって、がっ
		かりしていた。
		スポーツや外出が無くなり残念な様子がみられる。
身体的影響	体力の低下	運動の機会が減ったため体力の低下がみられている。
		大きい影響はないが、活動が縮小したことによる停滞感、体力の衰え
		などみられる。
	肥満	肥満傾向になった。
		体重の増加。
社会的影響	交流・活動の減少	作業以外の楽しみがなくなり、利用者間の交流の機会が少なくなった。
		社会参加の機会が減少した。
		就労している方々の交流が出来ず、企業での問題が、把握できない。
経済的影響	収入減少	収益の減少。
		なかなか代替活動ができない。イベントへの販売活動が出来ず、就労
		収入に影響がでて、工賃等の減少が見込まれる。
		バザー等が無くなり工賃が減った。
その他	影響ほとんどない	ほとんど見合わせていない。
	その他	利用者へは行事の事は話さず、楽しめるように工夫した。
		人数が密にならないように、活動も少人数で分かれておこなっている。
		旅行なども、また行けるようになる日を楽しみにされている。
		身体や情緒刺激が減ったことにより、健忘状態になられる方や、室内
		で過ごすことが多くなり、肥満や内臓機能の低下、情緒面でも不安定
		な状態になられるなど影響はあった。しかし、自閉的傾向の強い方は
		逆に見通しのつきやすい生活で落ち着かれるようになった方もおられ
		t.o
		生活様式の変化。
		外出の機会が減った事と、園主催の行事がなくなってしまった事を理解
l		しきれずにいる利用者がいた。

問 3-2-3 の具体的な影響は記述式で、表のとおりに分類したものが主な回答であった。

#### 問 3-2-4 今後再開するために必要な事柄をお教えください

#### ※記述式の回答は主なものになります

	162 6 64716 6 7 6 7
ワクチン・治療薬	感染防止に有効なワクチンの開発。
	新型コロナウイルス感染症の収束や効果的なワクチンや治療薬の開発。
コロナ患者の減少	感染レベルの低下感染レベル2以下。
	コロナ感染者減少の見通しがつけば。
コロナの収束	コロナが収まり、外出が心配なくできるようになること。
	新型コロナのある程度の終息報道が無いといろんな意味で再開は難しい
コロナの意識・認識	コロナへの意識付け。
	社会的認識として新型コロナウイルス感染が特別なことではなくなること。
医療体制	り患時に有効な医療手段の確保。
	インフルエンザと同様な医療体制の構築。
	感染症レベルがインフルエンザなみになること。
	東京都内での感染がおさまること。ワクチン・治療薬ができて、通常の感染症の扱いになる
	こと。
感染対策	感染リスクを下げるための環境整備、感染対策。
	感染予防策への習慣付けとその継続。
	予防対策の徹底、少人数での実施
	ソーシャルディスタンスの徹底、感染症対策の実施
	三密回避等の感染予防対策が徹底されていること
	手洗い・うがい・手指消毒を始め基本的感染症予防対策を講じ、なおかつ行事・イベント等
	に来場した全ての方の名前・電話番号を記入してもらい、座席やエリア等へ番号を付けてエリア
	分けをし、万が一感染者が発生した場合において迅速に連絡をし、感染拡大予防に努めて
	いくべきだと思います。
	密にならない様、少人数での企画や遠出ではなく近場で考える。
	感染しない事が確実だと信じられる設備。
	感染してないボランティアさんの確認が必要です。
プログラム開発	スポーツメニューの工夫。(直接触れ合わないような工夫)
運営方法の検討	事業所のみでの開催は厳しいため、どこかの機関が開催していただけると嬉しいです。
	「行政や社会福祉協議会等は"とりあえず中止"」を簡単に選択するが、そのような「思考
	停止の選択」をとっている限りなにもよくならないし、「どうにか出来る方法」を考え、「小規
	模分散型開催」のような形で小さく継続していく必要がある。
その他	小さい事から体を動かす熱意。
	国のしっかりとした施策。
	保護者や社会的に、そのような活動に対する恐怖感が軽減されない限り、感染状況に関わら
	ず再開は難しいと考える。
	今出来る事を考えて、楽しく過ごしてもらっている。

問 3-2-4 の今後の再開するために必要な事柄は記述式で、表のとおりに分類したものが主な回答であった。

問 3-2-5 新型コロナウイルス感染症の影響により、新たにはじめた活動・競技をお教えください。※記述式の回答は主なものになります

<b>、たしい</b> 。 小品及	近れの日日は上るものになりより
特になし	感染予防のため、取り組みをしていない。
	スポーツは、広い場所が無い為出来ない。
散歩・ウォーキング	散歩等ウォーキング。
	施設近辺での歩行や室内運動、個別運動等の回数を増やしました。
	屋外での運動。(公園利用のウォーキング等)
	週に3回、ウォーキングを30分程行う。
	ウォーキングの頻度や時間を増やす。
	施設周辺の散歩(外出)の機会を増やした。
	ウォーキングイベント。
11 III - 1 1	ウォーキング、散歩程度の外出機会を増やす程度しかできない。
体操・ストレッチ	飛沫感染を防止すべく、プロジェクターを利用して動画によるストレッチ体操を
	取り入れた。
	朝のラジオ体操に加え、軽いストレッチなどを追加するようになった。
	ラジオ体操、タオル体操、トレーニング器具を使った運動、ヨガなどを始めた。
	室内での体操、ヨガの実施。
	YouTube を活用した運動 運動不足やストレス発散できるストレッチ、リラクゼー
	ション。
	動くことが減ったので、誰でも知っている『ラジオ体操』を朝一で取り組むよう
	になりました。
	ダンス、エクササイズ。
	施設内での体操(てくてく体操)
	ヨガ。(マスクをしても苦しくない事や、声を出すことがなく飛沫がない。また、
	講師の方とも距離をおいても真似することが出来る為)
トレーニング	ジム、スイミング。
	踏み台昇降運動。
大会・運動会	室内での運動。   休奈線を供して、プイン国動会をした。
人云"理劉云	体育館を借りて、プチ運動会をした。
	外部や保護者みんなを呼んで行う秋の園祭を中止し、代わりに利用者、職員
	のみで運動会を行った。
障害者スポーツ	スポーツ協会の協力によるボッチャ体験。(11 月実施)
	グラウンドゴルフ。
	身体接触のない陸上競技を特設の部活動として設立。
リハビリテーション	近くの公園での歩行訓練・立位訓練。
	リハビリのための軽体操。
レクリエーション	施設内(敷地内)で出来る余興活動。(ボール遊びやボウリング等)
	施設内で行う軽運動の内容を少し変更した。個で行う内容を増やし、複数で
	行うボール運動等を中止し、音楽を流しながら楽しく取り組めるものを工夫して
	行っている。
	加盟する団体が主催したリモート盆踊り交流会に参加。新しく作られた盆踊り
	を、全国の仲間とリモートでつながって一緒に踊ることができました。
	3蜜を避けるような工夫、アイデアを職員で出し合ったゲーム。(釣りゲームなど)
	ソーシャルディスタンスを保つことができるバドミントンやペットボトルボウリング、
	風船バレーなど室内でもできるスポーツを取り入れた。
	11 月より運動不足の解消のために、体育館を借りてソフトバレーの運動を始め
	ました。
	接触を伴うスポーツを、接触の伴わない方法で実施している。
	室内で歩いたり、体操したり、風船バレーやペットボトルボウリングなどをしま
	した。
	パラシュート、ボール運びなど
1	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

問 3-2-5 の新型コロナウイルス感染症の影響により新たにはじめた活動・競技は記述式で、下記の内容が主な回答であった。

問 3-3-1 施設内で行われている運動やスポーツの種目について(複数回答) n=211

種目	回答数	率
行っていない	33	15.6%
運動会	40	19.0%
ウォーキング	101	47.9%
マラソン	6	2.8%
水泳	15	7.1%
バレーボール	11	5.2%
ソフトボール・野球	7	3.3%
ボウリング	35	16.6%
ダンス・エアロビック	51	24.2%
体操・ヨガ	98	46.4%
障害者スポーツ大会の競技種目	41	19.4%
ユニバーサルスポーツ・ニュースポーツ	19	9.0%
その他	26	12.3%

問 3-3-1 の施設「内」で行われている運動やスポーツの種目のトップ3は、「ウォーキング」 (47.9%)・「体操・ヨガ」 (46.4%)・「ダンス・エアロビック」 (24.2%) であった。

問 3-3-2 施設外で交流・実施している運動やスポーツの種目について(複数回答) n=209

種目	回答数	率
行っていない	49	23.4%
運動会	57	27.3%
ウォーキング	64	30.6%
マラソン	11	5.3%
水泳	18	8.6%
バレーボール	7	3.3%
ソフトボール・野球	7	3.3%
ボウリング	40	19.1%
ダンス・エアロビック	16	7.7%
体操・ヨガ	26	12.4%
障害者スポーツ大会の競技種目	47	22.5%
ユニバーサルスポーツ・ニュースポーツ	24	11.5%
その他	22	10.5%

問 3-3-2 の施設「外」で行われている運動やスポーツの種目のトップは「ウォーキング」(30.6%)

で、次に「運動会」(27.3%)であったが、3番目に多い回答は「行っていない」(23.4%)であった。

問 3-3-3 施設内で運動やスポーツ大会を開催していますか

開催状況	回答数	率
定期的に開催している	58	24.6%
開催したことがある	56	23.7%
開催していない	94	39.8%
不明(無回答)	28	11.9%
合計	236	100.0%

問 3-3-3 の施設「内」で運動やスポーツ大会を開催している状況は、「開催していない」(39.8%) が最多回答で、「定期的に開催している」(24.6%)・「開催したことがある」(23.7%)が近似の割合 で続いた。

問 3-3-4 施設外での運動やスポーツの大会に参加していますか

参加状況	回答数	率
毎回参加している	67	28.4%
参加したことがある	122	51.7%
参加したことはない	22	9.3%
不明(無回答)	25	10.6%
合計	236	100.0%

問 3-3-4 の施設「外」で運動やスポーツの大会に参加している状況は、「参加したことがある」 (51.7%) が半数以上を占め、次いで「毎回参加している」(28.4%) であった。

問 3-3-5 施設内で運動やスポーツが行われている頻度

頻度	回答数	率
毎日	35	14.8%
週 2・3 回	26	11.0%
毎週	20	8.5%
月 2・3 回	20	8.5%
毎月	19	8.1%
年 2・3 回	23	9.7%
毎年	12	5.1%
不定期	29	12.3%
不明(無回答)	52	22.0%
合計	236	100.0%

問 3-3-5 の施設「内」で運動やスポーツが行われている頻度は、「毎日」(14.8%)が一番多く、それ以外も満遍なく回答があった。

問 3-3-6 施設外で運動やスポーツが行われている頻度

頻度	回答数	率
毎日	8	3.4%
週 2・3 回	10	4.2%
毎週	7	3.0%
月 2・3 回	10	4.2%
毎月	11	4.7%
年 2・3 回	72	30.5%
毎年	32	13.6%
不定期	38	16.1%
不明(無回答)	48	20.3%
合計	236	100.0%

問 3-3-6 の施設「外」で運動やスポーツが行われている頻度は、「年2・3回」(30.5%) が最多回答で、「不明」を除けば、「不定期」(16.1%) と「毎年」(13.6%) が多く、3-3-5 の回答と比較すると、施設内外の頻度の違いが顕著に表れていた。

問 3-3-7 運動やスポーツを行う上での個人や団体の協力者について(複数回答) n=209

協力者	回答数	率
なし	78	37.3%
家族	48	23.0%
地域団体	35	16.7%
企業	11	5.3%
スポーツ専門家	18	8.6%
学識者	2	1.0%
競技団体	9	4.3%
大学・専門学校等(学生・教員)	10	4.8%
高校	3	1.4%
小・中学校	5	2.4%
NPO等	11	5.3%
行政	10	4.8%
労働組合	1	0.5%
社会福祉協議会等の福祉団体	23	11.0%
障害者団体	29	13.9%
障害者スポーツ関係団体	51	24.4%
総合型地域スポーツクラブ	4	1.9%
その他	17	8.1%

問3-3-7の運動やスポーツを行う上での協力者については、「なし」(37.3%)が最多回答で、次に「障害者スポーツ関係団体」(24.4%)と「家族」(23.0%)が多かった。

問 3-3-8 上記の協力者の中に有償の方はおられますか

状況	回答数	率
指導料を支払っている	21	16.0%
交通費のみ支払っている	10	7.6%
指導料や交通費等を支払う場合がある	11	8.4%
支払っていない	82	62.6%
不明(無回答)	7	5.3%
合計	131	100.0%

問 3-3-8 の協力者の有償の有無については、「支払っていない」(62.6%)が圧倒的に多く、次いで「指導料を支払っている」(16.0%)であった。

問 3-3-9 利用者様からの評価・感想について

評価・感想	回答数	率
とても楽しい	93	39.4%
まあ楽しい	73	30.9%
どちらとも言えない	11	4.7%
あまり楽しくない	0	0.0%
全く楽しくない	0	0.0%
不明(無回答)	59	25.0%
合計	236	100.0%

問 3-3-9 の利用者様からの評価・感想については、「とても楽しい」(39.4%) と「まあ楽しい」(30.9%) が多かった。

問 3-3-10 運動やスポーツ活動を行う上で、課題となっている事柄について(複数回答) n=209

課題となっている事柄	回答数	率
特にない	38	18.2%
資金不足	37	17.7%
会場確保	67	32.1%
ボランティア等の人材不足	68	32.5%
職員等の人材不足	100	47.8%
競技用具の手配	34	16.3%
新たな競技の情報	31	14.8%
運営のノウハウ	28	13.4%
指導者の不足	54	25.8%
アクセス・会場の立地	28	13.4%
利用者の高齢化	74	35.4%
時間がない	36	17.2%
その他	11	5.3%

問 3-3-10 の運動やスポーツを行う上での課題は、「職員等の人材不足」(47.8%)が最多回答で、

「利用者の高齢化」(35.4%)・「ボランティア等の人材不足」(32.5%)・「会場確保」(32.1%)・「指導者の不足」(25.8%)が上位を占めた。人材に関する課題が多いと言えるだろう。

#### (4) ユニバーサルスポーツについて

#### 問 4-1 ユニバーサルスポーツをご存じですか

認知状況	回答数	率
競技内容・考え方まで知っている	21	8.9%
どんな競技かをある程度知っている	67	28.4%
名前は聞いたことがある	101	42.8%
知らない	14	5.9%
不明(無回答)	33	14.0%
合計	236	100.0%

問 4-1 のユニバーサルスポーツの認知状況は、「名前は聞いたことがある」(42.8%) が最多回答で、次に「どんな競技かをある程度知っている」(28.4%) であった。「競技内容・考え方まで知っている」(8.9%) を加えると、80%以上の割合で、名前以上の認知度があると言えるだろう。

#### 問 4-2 ユニバーサルスポーツについてどのような種目を思いうかべますか

※記述式の回答は主なものになります

障害者スポーツ競技大会、パラリンピック等の種目	ふうせんバレーボール / ボッチャ / 卓球バレー / ブライ
	ンドサッカー / フライングディスクゴルフ
運動会などの種目	綱引き/玉入れ/リレー/大玉送り
ニュースポーツ	サッカーソフト / ペタンク / フラバールボール / ジャンボー
	ルリレー / カローリング / グランドゴルフ / ティーボール
	/ ホールインワン / ロープ送り / 車椅子をつかった各種
	競技 / サイレントテニス / サイレント卓球 / スポーツチャ
	ンバラ / キンボール / ユニカール / ペタボート / スリー
	アイズ / ラダーゲッター / ドッチビー / スカットボール
体操	リズム体操
レクリエーション	輪投げ/囲碁ボール
その他	駅伝 / ボウリング / テーブルテニス /e スポーツ

問4-2のユニバーサルスポーツについての種目は、記述式で下記の内容下記の内容が回答であった。

#### 問 4-3 ユニバーサルスポーツへの参加について(複数回答)

n=196

参加状況	回答数	率
参加していない	75	38.3%
地域の大会・イベントなどに参加した	99	50.5%
施設内の行事で行った	23	11.7%
定期的に競技体験を行っている	10	5.1%
職員を指導者研修会へ派遣した	6	3.1%
その他	11	5.6%

問4-3のユニバーサルスポーツへの参加については、「地域の大会・イベントなどに参加した」

#### 問 4-4 ユニバーサルスポーツへの今後の取組についてお教えください

#### ※記述式の回答は主なものになります

	る上ない/になり	
継続実施	特定種目の取組	ボッチャは前から活動に取り入れているので、今後も続けていきたい。
		ボッチャ程度は事業所でも可能。場所にも限りがある為。
		ペタンクは障害者のスポーツ大会で実施している。
		再開出来れば、卓球バレーを続けて参加したい。
		月1回福祉の体育館を借りて、サイレント卓球を行っている。
大会参加		近隣で大会があるときは、参加したい。
		イベント等があれば積極的に参加をしたい。また、事業所でできそうな
		内容のものであれば、日中の活動内容に組み込みたい。
		特別支援学校スポーツ大会、障がい者総合体育大会の参加。
開催できる環境整備	活動時間	普段は昼食前に散歩に出るのが身体活動の中心ですが、作業中心の
		日中活動をレクリエーション活動やユニバーサルスポーツを楽しむ時間
		にしたいと考えています。
		就労継続支援B型事業所は、利用者の月額平均工賃により報酬単価
		が決まるので、正直工賃アップをさせるため日々作業中心になっている。
	  活動内容	
	/11 割り谷	楽しめるものがあれば日中活動のプログラムにも活用したい。
		身近に参加できる、環境や場があれば体験したいし、好評であれば参
		加の輪を広めたい。
		ともに楽しめるもの・場所スポーツバリアフリー。
		誰でも体験できるシステムが欲しい。(都市部以外の地区にも)
	8* == 4± 1/1	安心して取り組める環境を作る事。
	障害特性	重度心身障害児・者にもスポーツ体験させたい。
	Ha Mir da	障害が重くても参加できるものは取り組みたい。
	指導者	土曜日の余暇活動として講師の方に来ていただけるならば、取り組み
		たい。
		室内で行えるものや身体障がいの方でも参加しやすいスポーツを毎週
		のスポーツ教室で実施していきたい。
		職員が指導会に参加し正しいやり方を学ぶ。
		今後大会などに参加したい。加えて研修会などあれば職員を派遣して、
		養成したい。
		指導者派遣について、興味がある。利用者の活動の際に一緒に取り
		組んでいただきたい。
		指導者等の人材がいないため、今後も積極的な取り組みは難しいと考
	田少一ナフ西山	えます。
コロナ禍	開催できる環境	コロナ禍のため、十分な形ではないが引き続き取り組んでいく。
		コロナ感染がおちつき、地域での招待行事等あれば参加してみたい。
		社会情勢を見ながら感染症対策が十分と判断できる段階で地域イベン
		トへの参加を再開。
		コロナが落ち着いたら利用者さんの運動不足解消や健康促進を目的に
		地域の福祉施設との交流を踏まえ参加させていただきたいと思います。
		適切な距離を保ちつつ出来るユニバーサルスポーツがあればよろしい
		かと思います。
		用具を借りたりしながらコロナ禍でも施設内で楽しんでいきたい。
現状維持		1週間ずっと作業に従事することがしんどい方のために、月2回程度簡
		単なスポーツ活動を行っている。(輪投げその他) 利用者全体を対象と
		したスポーツ活動はあまりできていない。

現状維持	支援者の不足で新たな取り組みは難しい。せめて、現在の取り組みを
	維持できるように頑張りたい。
現状維持	個別のニーズにより、体を動かしたい方などは近隣のプールに行ったり、
	風船バレーのチームを主催されている方もおり、参加していく事
	年齢層も徐々に高くなり、体を動かすことを嫌がる方もいるので、今の
	ペースで十分だと考えています。
	引き続き、大会開催、指導者の育成、スポーツ人口の拡大に努めていく。

問 4-4 のユニバーサルスポーツの今後取組は記述式で、表のとおりに分類したものが主な回答であった。

問 4-5 ユニバーサルスポーツの指導者派遣に関心はありますか

関心の有無	回答数	率
関心がある	103	43.6%
関心がない	89	37.7%
不明(無回答)	44	18.6%
合計	236	100.0%

問 4-5 のユニバーサルスポーツの指導者派遣の関心は、「関心がある」(43.6%) と「関心がない」(37.7%) で、5.9%の差でしかなかった。

#### (5) ふれあいのスポーツ広場について

最後の質問項目では、当基金が実施しているふれあいのスポーツ広場の認知率と、参加の経験、今 後の関心を聞いた。

問 5-1「ふれあいのスポーツ広場」をご存じですか

認知状況	回答数	率
知っている	173	73.3%
知らない	27	11.4%
不明(無回答)	36	15.3%
合計	236	100.0%

問 5-2 ふれあいのスポーツ広場の参加の有無について

参加の有無	回答数	率
毎回参加している	88	37.3%
参加したことがある	76	32.2%
参加したことはない	35	14.8%
不明(無回答)	37	15.7%
合計	236	100.0%

#### 問 5-3 この大会に関心はおありですか。

関心の有無	回答数	率
関心がある	178	75.4%
関心がない	21	8.9%
不明(無回答)	37	15.7%
合計	236	100.0%

#### 問 今回の調査について

調査について	回答数	率
適切だった	110	46.6%
短かった	1	0.4%
長かった	74	31.4%
不明(無回答)	51	21.6%
合計	236	100.0%

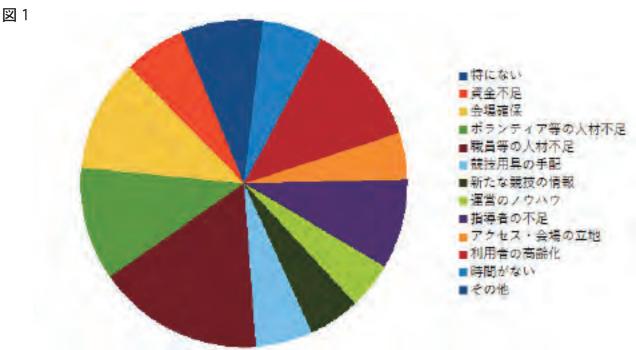
## 第3章 要点の整理

#### 第1節 要点の整理

#### (1) 取組にあたっての課題

要点を整理するにあたり、運動やスポーツへの取組上で課題となっている事柄を聞いた。問 3-3-10 の回答を検討し、要点の整理につなげていきたい。

問 3-3-10 運動やスポーツ活動を行う上で、課題となっている事柄について(複数回答)



n=209

課題となっている事柄	回答数	率
特にない	38	18.2%
資金不足	37	17.7%
会場確保	67	32.1%
ボランティア等の人材不足	68	32.5%
職員等の人材不足	100	47.8%
競技用具の手配	34	16.3%
新たな競技の情報	31	14.8%
運営のノウハウ	28	13.4%
指導者の不足	54	25.8%
アクセス・会場の立地	28	13.4%
利用者の高齢化	74	35.4%
時間がない	36	17.2%
その他	11	5.3%

職員の不足、ボランティアの不足、指導者の不足など、人的資源の不足が大きな比重を締めている。 職員の不足は、ボランティアまたは指導者のマネジメントが難しくなると考えられ、日常業務で手一杯の 職員像が浮かぶ。

また、利用者の高齢化についても課題としてあげられている。高齢者ほど健康維持・管理のための 運動が必要とされるとはいえ、高齢者にも適応可能なプログラムが開発できていない状況にあると考え られる。

次に比重が高い項目は、会場確保である。大規模な事業所においては、運動場や体育館等の設備がある事業所も考えられるが、比較的小規模な事業所においては、自らの事業所の中で会場を設定することは困難だと考えられる。

また、利用者の高齢化も高い回答率となっている。

これらの回答を参考に、運動やスポーツに取り組むための要点を整理した。

#### (2) 要点の整理

#### ①事業所の規模

事業所の利用者数、職員数は本来提供している福祉サービスのプラスアルファと考えられるスポーツ への取組と関係性が深いと考えられる。規模の大きな事業所ほど多様な職員がおられ、多様な活動が 可能と考えられる。

また、利用者数などの人的な規模は、施設の設備の規模と比例すると考えられる。小規模な事業所においては、運動やスポーツを行う場所が事業所内にないという課題もある。

ここでは、事業所における利用者、職員数と他の質問項目の中で差異のある項目について、比較整理をしたい。

#### ②協力者・団体・組織との関わり

事業所を利用する利用者、職員以外の保護者、ボランティア等の協力者の有無も取組の重要な要素と考えられる。日常的な散歩や体操から非日常的な活動を取り組む場合、利用者へのフォローアップ、福祉サービスとしての支援以外に、プログラムを運営するための人員確保、専門性の提供という意味で、事業所外の協力者が重要と考えられる。また、規模の小さな事業所においては、日常業務で手一杯と考えられる職員に違った角度から情報を提供できる存在としての協力者の役割は重要なものになると考えられる。

また、障害福祉サービス事業所では、様々な場面で自らが属する障害者団体や障害福祉サービス事業所の連絡会をはじめ、地域における自治会などの組織、取引のある企業や支援を受ける企業・団体、ボランティアを受け入れる学校等、様々な団体・組織とネットワークのなかで活動を進めていると考えられる。協力者の有無と役割から、事業所における取組のヒントとなる事柄を探りたい。

#### ③利用者の高齢化

私どもの想定以上に、利用者の高齢化による課題の比率が高いと感じる。また、新型コロナウイルス 感染症の流行に伴う感染症対策の観点から、高齢者の多い事業所では、各種課題が発生していると考 えられる。

設問は少ないながら記述項目を援用しながら、利用者の高齢化に対する課題を検討したい。

#### ④新型コロナウイルス感染症に関する事柄

2020年初頭から全国的に流行している新型コロナウイルス感染症は、障害福祉サービス事業所においても大きな影響を与えた。日常的なサービスの場面においても感染症対策の徹底と感染者が発生した場合の対応など、事業所の規模に関わらず大きな負担になったと考えられる。

流行を受けた事業所の対応と取組を整理したい。

#### ⑤ユニバーサルスポーツ

最後にこの調査の目的であるユニバーサルスポーツへの理解と、実施内容、今後の取組について整理をしたい。前項で整理をする新型コロナウイルス感染症による影響の、中での取組は難しい状況であるが、利用者個人としても、事業所全体としても、他の社会資源と関わる大きな契機となり得るので、どのような形での取組が考えられるのか要件を抽出したい。

#### 第2節 要点の比較

ここでは、前項で整理をした要点について他の回答項目と対比し、具体的な課題の抽出につなげていきたい。

#### ①事業所の規模

障害福祉サービス事業所は、利用者数が事業所の規模を計る上でもっとも基本的な指標と考えられる。利用者数と、特徴的な項目との対比を行いながら、事業所の規模による課題を探りたい。ここでは、利用者数を 10 名まで、11 名から 30 名、31 名から 100 名、101 名以上の 4 つに分類し、それぞれの総回答数に占める割合で対比した。

#### 図2 利用者数と活動内容の対比

	レクリエーション活動	~ 10	11 ~ 30	31 <b>~</b> 100	101 ~
	行っていない	6%	4%	4%	0%
利用者交流	宿泊を伴う旅行・キャンプ	44%	33%	35%	71%
	宿泊を伴わない旅行・遠足	69%	73%	72%	92%
	利用者間の交流会	38%	56%	62%	75%
	バザー・お祭りなどのイベントの開催	56%	54%	75%	92%
	地域で開催される行事への参加	44%	56%	79%	83%
文化活動	観劇・音楽鑑賞等	38%	33%	44%	58%
	カラオケ大会	31%	45%	51%	50%
	音楽演奏	6%	14%	33%	50%
	絵画・書画・クラフト等	25%	36%	44%	63%
運動やスポーツ	利用者間の交流を目的とした運動やスポーツ	69%	62%	66%	75%
	地域住民などとの交流を目的とした運動やスポーツ	13%	11%	24%	25%
	利用者を対象にした運動やスポーツ教室	25%	44%	42%	71%
	競技大会などへの指導者・選手の派遣	6%	11%	22%	58%
	その他	6%	1%	6%	13%

レクリエーション (余暇)活動と利用者数との対比を見てみる。どの回答項目に対しても、利用者数が大きくなるほど、実施している内容が増えていくことが判る。特に、宿泊を伴う旅行・キャンプや、競技大会への指導者・選手の派遣など、移動が伴う活動については、101名以上の規模の事業所の比率が目立って高くなる。

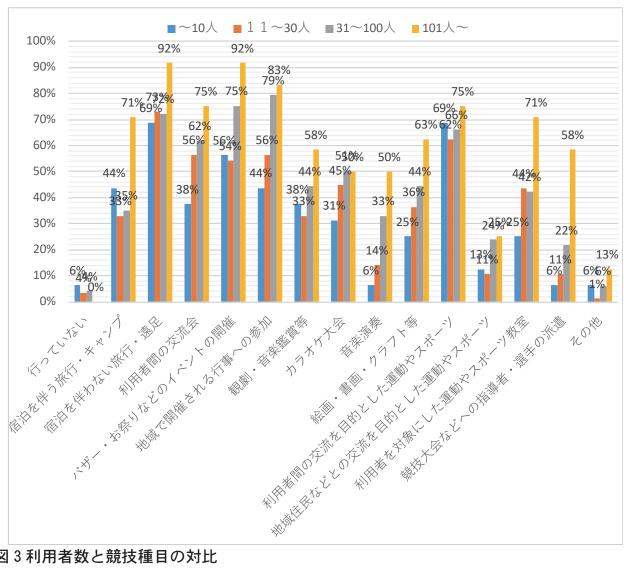


図3利用者数と競技種目の対比

種目	~ 10	11 ~ 30	31 <b>~</b> 100	101 ~
行っていない	31%	19%	24%	17%
運動会	13%	20%	31%	21%
ウォーキング	19%	28%	31%	25%
マラソン	0%	2%	6%	13%
水泳	0%	5%	8%	25%
バレーボール	0%	2%	4%	4%
ソフトボール・野球	6%	1%	4%	4%
ボウリング	0%	24%	15%	17%
ダンス・エアロビック	0%	6%	8%	13%
体操・ヨガ	13%	8%	13%	13%
障害者スポーツ大会の競技種目	25%	16%	18%	46%
ユニバーサルスポーツ・ニュースポーツ	13%	13%	7%	13%
その他	6%	13%	7%	4%

行われている運動やスポーツの種目については、ウォーキングや体操・ヨガなど、準備に負担のかか らない種目については全体的に行われているが、障害者スポーツ大会に関わる競技では、大規模な事 業所の実施割合が高くなる。実際に大会へ選手や指導者の派遣を行える大規模な団体では、実施する 比率が高くなると考えられる。

競技全般についてはいずれも実施比率が低い。競技の安全管理に人的資源が整わないなどが考えられる。また場所の確保も難しい事柄であると考えられる。

また水泳についても、大規模な事業所以外の取組は低い。安全管理のための人的資源が整わないことが要因と考えられる。

#### 図4利用者数とスポーツ大会開催の対比

開催状況	~ 10	11 ~ 30	31 <b>~</b> 100	101 ~
定期的に開催している	13%	21%	24%	42%
開催したことがある	13%	20%	30%	29%
開催していない	69%	48%	36%	21%
不明 (無回答)	6%	11%	10%	8%

事業所内で行われるスポーツ大会も、事業所の規模と比例している。人的資源の他に、会場の確保が大きな課題となるであろう。事業所が主体となってスポーツ大会を運営するためには、事業所の職員だけでは人的資源が整わないと考えられる。

次項では、協力者・団体の有無と事業所の規模の相関を見てみたい。

#### ②協力者・団体・組織との関わり

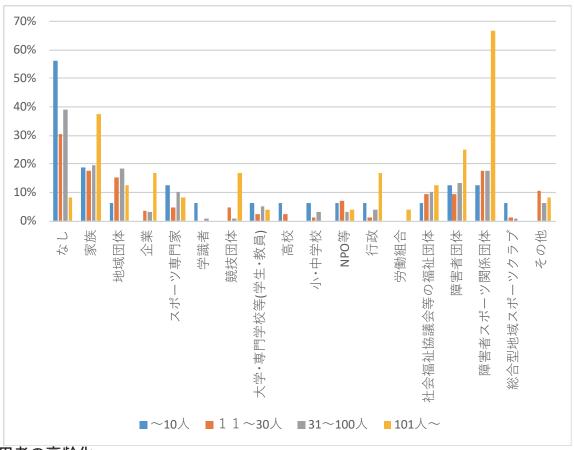
#### 図5協力者の有無と事業所の規模との対比

協力者	<b>~</b> 10	11~ 30	31 <b>~</b> 100	101 ~
なし	56%	31%	39%	8%
家族	19%	18%	20%	38%
地域団体	6%	15%	19%	13%
企業	0%	4%	3%	17%
スポーツ専門家	13%	5%	10%	8%
学識者	6%	0%	1%	0%
競技団体	0%	5%	1%	17%
大学·専門学校等(学生·教員)	6%	2%	5%	4%
高校	6%	2%	0%	0%
小·中学校	6%	1%	3%	0%
NPO 等	6%	7%	3%	4%
行政	6%	1%	4%	17%
労働組合	0%	0%	0%	4%
社会福祉協議会等の福祉団体	6%	9%	10%	13%
障害者団体	13%	9%	13%	25%
障害者スポーツ関係団体	13%	18%	18%	67%
総合型地域スポーツクラブ	6%	1%	1%	0%
その他	0%	11%	6%	8%

協力者・団体の有無と事業所の規模にも相関関係があると見られる。 利用者 10 名未満の事業所は、協力者・団体が 56% ないと回答している。

一方で、大規模な事業所では、障害者スポーツ団体の関わりが 67% あると回答している。これは、 障害者スポーツ大会への参加、参画などから比率が高いと考えられる。

障害者スポーツ団体の回答をのぞくと、事業所の規模に関わらず家族の比重が高く専門家の関与と ネットワーキングが課題として考えられるだろう。



#### ③利用者の高齢化

「問 4-4 ユニバーサルスポーツへの今後の取組についてお教えください。」の記述式回答に「年齢層も徐々に高くなり、体を動かすことを嫌がる方もいるので、今のペースで十分だと考えています。」との回答があり、私たちがイメージする「スポーツ」よりも健康増進「ウェルネス」をイメージする形の内容に一定のニーズがあると感じた。問 3-3-10 の利用者の高齢化についての回答が 35.4% あったこととも大きな比重のある回答数だと感じている。

障害のある方と高齢の方とのプログラムを、別なものとして考えるよりも、その場その場にあった形で 適応していくこと。共通化していくこともたいせつな視点であろう。

今後、障害のある方を対象としたスポーツの活動にとって、高齢化に対応した競技、運営方法などの 開拓が必要となろう。

#### ④新型コロナウイルス感染症に関する事柄

図 6 開催しているレクリエーションと新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった 活動の対比

	レクリエーション活動	行っていた	見合わせた	見合わせた 比率
	行っていない	8	-	_
利用者交流	宿泊を伴う旅行・キャンプ	89	80	90%
	宿泊を伴わない旅行・遠足	170	147	86%
	利用者間の交流会	136	95	70%
	バザー・お祭りなどのイベントの開催	155	145	94%
	地域で開催される行事への参加	157	146	93%
文化活動	観劇・音楽鑑賞等	91	77	85%
	カラオケ大会	108	84	78%
	音楽演奏	57	39	68%
	絵画・書画・クラフト等	97	25	26%
運動や	利用者間の交流を目的とした運動やスポーツ	151	119	79%
スポーツ	地域住民などとの交流を目的とした運動やスポーツ	42	42	100%
	利用者を対象にした運動やスポーツ教室	103	74	72%
	競技大会などへの指導者・選手の派遣	47	43	91%
	その他	13	12	92%

新型コロナウイルス感染症の影響により、実施を見合わせた活動について、どのような活動が中止となったか、実施数と中止数を対比した。多くの行事が中止となっているが、事業所内で開催される比較的一人で取り組むことができるであろう、絵画・書画・クラフト等については、中止となった比率は低い。逆に事業所外との交流が目的の活動や協力が必要と考えられる活動、あるいは移動が伴う旅行やスポーツ競技大会への参加については中止率は高かった。

問 3-2-3 の記述回答で聞いた、開催を見合わせた時の影響について、下記の通り分類できた。

情緒不安定・不安 残念・元気がない

身体的影響 体力の低下

肥満

社会的影響交流・活動の減少

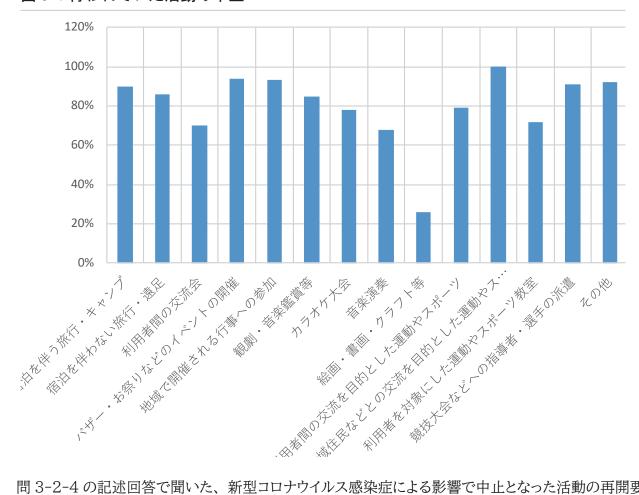
経済的影響 収入減少

利用者にとって、スポーツに関わらず、楽しみにしている旅行や様々なイベントの中止は、ストレスの 原因となることは容易に想像できる。

また、肥満などの身体的な影響については、広く社会的に見られている影響である。

同時に、様々なレクリエーション活動と、地域社会をはじめとする他の領域の組織・団体との交流をリンクさせていることが多い障害福祉サービス事業所にとっては、事業所としても貴重な機会を失うこととなり、ひいてはバザーやイベントへの出展などで販売をしていた商品の販路が失われることとなっている。利用者個人にとっても、事業所全体としても大きな課題となっていると言えるだろう。

#### 図 6-1 行われていた活動の中止



問 3-2-4 の記述回答で聞いた、新型コロナウイルス感染症による影響で中止となった活動の再開要 件については、次の通り分類できた。

ワクチン・治療薬

コロナ患者の減少

コロナの収束

コロナの意識・認識

医療体制

感染対策

プログラム開発

運営方法の検討

流行状況や医療体制の整備、ワクチンの接種など、事業所自体では取組の難しい回答が目立つ。事 業所自体の判断と同時に、保護者などの理解も重要な要件となるため、各事業所においても難しい状 況にあると整理できる。

一方で、開催方法をしっかりと感染症予防対策をした中での再開を検討している回答もあった。

問 3-2-5 の記述回答で聞いた新型コロナウイルス感染症流行後の新たな取組について下記の通り分 類できた。

大会・運動会 レクリエーション

散歩・ウォーキング 体操・ストレッチ 障害者スポーツ

トレーニング リハビリテーション 問 3-2-3 の回答であった、肥満や体力低下に対応するため、散歩、ウォーキングや体操などの事業 所関係者以外で実施可能な運動をはじめたという回答が多かった。

一方で、体育館を借りたミニ運動会など、利用者のストレス解消のためと思われる活動の実施もあった。 散歩、ウォーキングや体操・ヨガなど、一人で取り組むことができるであろう種目が目立つ。

新型コロナウイルス感染症による影響で中止となる活動が多い中、利用者の健康維持やストレス軽減の為に取り組んでいる事業所の活動が浮かび上がる。

## ⑤ユニバーサルスポーツについて

問 4-1 でユニバーサルスポーツの認知度を聞いたが、「名前は聞いたことがある」が最多回答である程度の認知はあるが充分な理解があるとは言えない状況と考えられる。 2020 年に開催予定であったパラリンピック競技大会の影響により、名称への認知は進んできたが、各種報道や自治体での取組があったためと考えられる。

また、問 4-3 で聞いた、ユニバーサルスポーツへの参加では、「地域の大会・イベントなどに参加した」 が最多回答であり、認知度よりも参加経験が高い結果となっている。ユニバーサルスポーツへの関心で 参加というよりも、開催した自治体や運営団体への信頼から参加した結果であると示唆される。

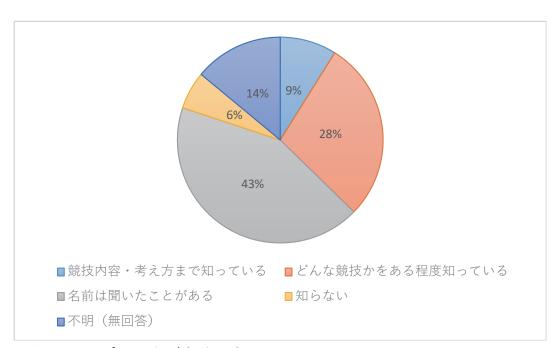
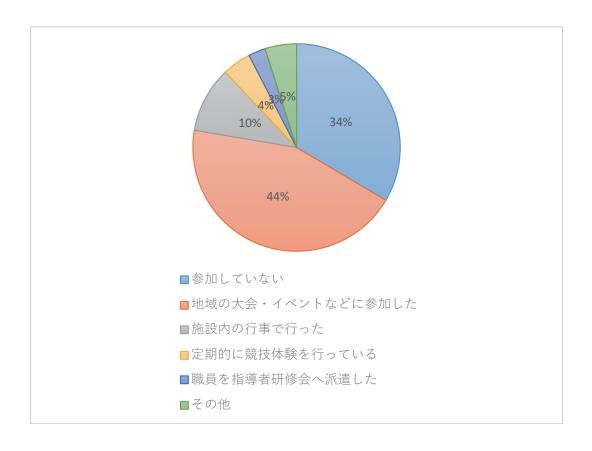


図 7 ユニバーサルスポーツをご存じですか

認知状況	回答数	率
競技内容・考え方まで知っている	21	8.9%
どんな競技かをある程度知っている	67	28.4%
名前は聞いたことがある	101	42.8%
知らない	14	5.9%
不明(無回答)	33	14.0%
合計	236	100.0%

図8 ユニバーサルスポーツへの参加について(複数回答) n=196



参加状況	回答数	率
参加していない	75	38.3%
地域の大会・イベントなどに参加した	99	50.5%
施設内の行事で行った	23	11.7%
定期的に競技体験を行っている	10	5.1%
職員を指導者研修会へ派遣した	6	3.1%
その他	11	5.6%

一方で、ユニバーサルスポーツの競技内容を聞いた問 4-2 では、障害者スポーツの種目、一般的な運動会の種目、レクリエーションと考えられる種目など混在しており、ユニバーサルスポーツの定義が曖昧なことも含めて、整理されていない状況が判る。

問 4-4 では、ユニバーサルスポーツへの今後の取組について下記の通り分類できた。

新型コロナウイルス感染症による影響で活動が充分に行えない中、今後に向けた取組を考えていこうという意欲と同時に、コロナ禍の収束と人的資源の確保が難しい中、現状維持が「精一杯であるという回答が目立った。

#### 継続実施

特定種目の取組

大会参加

開催できる環境整備 活動時間 / 活動内容 / 障害特性 / 指導者

コロナ禍 開催できる環境

現状維持

## 第3節 コラム

## 新型コロナウイルス流行下における障害者スポーツの取組

## 立命館大学産業社会学部教授 金山千広

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染流行により、私たちの生活は一変しました。特に感染予防に伴う「新しい生活様式」の中で求められる「ソーシャルディスタンス」は、「文化としてのスポーツ」を変容させつつあります。スポーツは「する」「みる」「ささえる」という行為のいずれもが密集・密着を伴います。とりわけ障害者のスポーツには、障害のない人のスポーツに存在しないスポーツを行うための「支援者」の存在があります。また障害の種類や程度によって「支援者」は、スポーツの場のみならず生活介助を含みます。

コロナ禍では、地域における障害者スポーツの大 会やイベントの多くが中止を余儀なくされました。直 接的な人との接触の禁止や指導員・ボランティアな どのサポート制限は一見するならば、障害者スポー ツの停滞を招くように見えます。しかしながら、新型 コロナウイルスの感染拡大は、オンデマンドやオンラ インを通した情報のやりとりをより身近に引き寄せ、 社会改革を一気に進めた側面もあります。このこと を背景にコロナ禍においては、各競技団体や障害者 優先スポーツ施設が HP を通して以前よりも多くの 情報を発信するようになりました。統括団体である 日本障害者スポーツ協会のオンデマンド講座をはじ め、障害者優先スポーツ施設でも HP や SNS を通 して家庭でできる運動を発信しています。この状況 は、障害の有無に関わらずより多くの人が日常的な 障害者スポーツに触れる機会を拡大しているととら えることもできるでしょう。

さて、with コロナという環境下での「する」スポーツ、「ささえる」スポーツに注目してみましょう。「新しい生活様式」を踏まえたスポーツの再開~実践は、スポーツ庁、日本スポーツ協会、各種競技









団体、障害者スポーツ協会などがアスリート向けガイドラインやイベント用ガイドラインを公表しています。 また、日本障害者スポーツ協会では指導者研修会用のガイドラインも公表しています。レクリエーショナルな活動についての感染予防では、日本レクリエーション協会が岐阜県レクリエーション協会のガイドラインを推奨しています(表1にガイドラインの一部を示しました)。

ただ、活動が多岐に及ぶ障害者スポーツのボランティアに共通するガイドラインは設定されていません。 その中で、各地域の障害者スポーツ指導者協議会などが、競技種目別団体のガイドラインから必要に 応じて機材の消毒方法をピックアップしたり、関連個所が示している体調チェックシートなどを援用して 活動再開に至っている実態も見えてきました。with コロナという環境下でのスポーツ活動、とりわけ障 害者スポーツの活動には、エビデンスに基づいた障害への配慮を礎に感染予防を踏まえた消毒や対人 援助にかかる注意事項を明文化して、活動する仲間と情報共有する力量が求められるようになりました。

最後に事例を紹介したいと思います。京都障害者スポーツ振興会が主催する「スポーツのつどい」 事業は、障害のある人とその家族を対象にスポーツの日常化と社会参加を目的として昭和の時代から 月1回のペースで開催されてきました。コロナ禍で事業再開が見通せない状況下では、事業参加者や ボランティアの「つながり」を模索しつつ、新たな事業として活動再開マニュアルや動画作成に取り組ん でいます。ここでの情報の収集や動画編集作業は、大学生ボランティアが請け負っています。この事例 の様にコロナ禍でのスポーツは、あらたな課題を発見したり、課題に即したつながりを広げることにより、 創意工夫して歩む必要性を生んでいます。

# 表1 スポーツ活動に際しての注意事項:基本的な考え方活動に適した予防マニュアルを作成する力量

- 各中央競技団体によるガイドライン(日本スポーツ協会HPより) https://www.japan-sports.or.jp/tabid1278.html
- スポーツイベント開催・実施時の感染防止策チェックリスト(日本スポーツ協会HPより)
  https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/jspo/guideline\_checklist.pdf
- スポーツ庁HPでのガイドライン紹介ページ https://www.mext.go.jp/sports/b\_menu/sports/mcatetop01/list/detail/jsa\_00021.html
- 今後の活動に向けた段階的準備の考え方(HPSC)
  https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/Portals/0/dankaitekijunbi\_0520.pdf
- 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策としてのスポーツ活動再開ガイドライン(HPSC)
  - https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/Portals/0/katudousaikaiguideline.pdf
- 岐阜県レクリエーション協会:レクリエーション活動の再開に向けた新型コロナウイルス 感染拡大予防ガイドライン
  - http://www7b.biglobe.ne.jp/~npo-gifu-rec/r3.1.11kaiteiban.pdf
- 日本障がい者スポーツ協会:新型コロナウイルス感染症対策特設ページ https://www.jsad.or.jp/coronavirus/index.html

## 第4章課題と提言

## 第1節 ユニバーサルスポーツに関わる障壁

最後に今まで見てきた調査結果、整理した用件を基に、ユニバーサルスポーツへの取り組みの障壁となる事柄を整理し、対応する方策を探りたい。

## (1) 事業所の規模による障壁

## · 人的資源

障害福祉サービス事業所の規模は、10名以下の小規模な事業所から、1,000 名を超えるような大規模なものまであり、主に職員数によって生じる障壁があると考えられる。

支援が必要な方の人数に応じて職員数が配されているのが基本であるが、人員数が増えるほど、職員ひとりあたりが抱える仕事量が減ると考えられる。大規模な施設では割り当てられる、レクリエーション担当やスポーツ担当という役割を、小規模な事業所では割り当てられないだろう。

同時に、ボランティア担当する職員がいない場合、募集や受け入れ、マネジメントも難しい事か予想 される。

現在、行われている日常業務にプラスする、レクリエーションやスポーツの活動に取り組む事の大きな障壁となると考えられる。

#### 会場や設備

大規模な施設ならば、敷地や建屋も大きく、食堂などもあり、独自に体育館や運動場を持っている事業所もある。小規模な事業所では、体操する場所の確保も難しい場合があるだろう。

また、障害者スポーツ大会へ選手の指導者の派遣をしている事業所の場合、競技用具を保有している事業所も多いだろう。

場所と用具などの設備の点で、小規模な事業所にとっては障壁となることが考えられる。

#### ・情報不足

規模の大きな事業所では、障害福祉サービスの事業所ネットワークや地域福祉のネットワークの中で 役割を担っており、そこから伝わる情報があると考えられるが、規模のちいさな事業所では情報の伝達 から漏れていることがあると考えられる。小規模事業所の側では、日常活動とは関わりの薄い事柄として、 積極的な情報収集がされていないこともあるだろう。

地域における障害者福祉の情報発信の中で、意識的に伝えることは必要な事柄だろう。各種大会やイベントの告知や参加者募集以外にも、定期的な情報伝達の体制が必要だろう。

#### ・資金不足

小規模な事業所の場合、レクリエーション活動に振り向けられる資金的な余裕がないことが考えられる。日常活動での資金配分も薄い中で、他の経費に振り向ける優先順位は高くなるだろう。

大規模な事業所でも、潤沢な予算があるとはいえず、バザーなど資金獲得が伴う行事や、支援者・ 保護者などが関わりやすい旅行や遠足などの行事が優先される場合もあるだろう。

経費的な負担が発生する場合、取り組みへの障壁となるだろう。

#### (2) 事業所に内包される障壁

## ・利用者の高齢化

今回の調査の回答で、高齢化に関わる回答が複数あった。「利用者の高齢化に伴い、スポーツの必要性が低くなっている」と考えられる事業所も少なくないと感じる。

一方で高齢化における健康維持のための運動への取り組みは重要視されており、介護保険のなかで もメニュー化されている。

高齢化に対応したプログラム開発や提供が弱い場合、障壁になると考えられ、スポーツの開発や提供 側が意識するべき事柄だろう。

#### ・工賃獲得のための活動時間不足

事業所が就労系障害福祉サービスを提供している場合、利用者の工賃獲得の優先順位が良く、スポーツに関わらず、余暇活動の時間があまりとれないという回答があった。なるべく多くの工賃を支払うことか主目的である事業所としては当然の事柄である。利用者の健康維持のための運動への取り組み自体も、余暇としての活動なのか、企業の福利厚生の様な形でとらえるべきものなのか、事業所によりまちまちだろう。いずれにしても、時間的な余裕がない中で、運動やスポーツに取り組むためには障壁となる事柄と考えられる。

## (3) 事業所周縁の障壁

#### ・専門家・指導者の不足

障害者スポーツの分野でも、とりわけユニバーサルやアダプテッドスポーツといわれる、障害の有無に関わらない分野のスポーツについて、専門家や指導者は多くなく、地域的にも存在が偏っている。概念として、障害者スポーツとの混用も目立つため、事業所にとってはわかりづらく関わりづらいと言えるだろう。

障害の有無に関わらず共に楽しむことができるこれらの競技は、障害福祉サービス事業所側からは、 社会への架け橋となり得、また企業や学校、団体からは障害理解のための入りやすい入り口となるだろう。 きちんとした体系的な整理と、それに基づく理論をきちんと整理された専門家や指導者の充実が求め られる。

#### ・プログラム開発・適正化

様々な障害種別や程度の方に適応するため、ユニバーサルスポーツの競技はある程度の柔軟性が求められる。それぞれの状況に応じて競技内容を適合させていくためには、事業所の状況を把握し、適合させる作業が必要となるだろう。この役割を職員に求める場合、日常業務との関わりで時間がとれないことやスポーツの専門的な知識がないなどの障壁があるだろう。

#### (4) 新型コロナウイルス感染症による影響による障壁

#### ・感染症対策

2020年に始まった新型コロナウイルス感染症の流行は、障害福祉サービス事業所にも多大な影響を

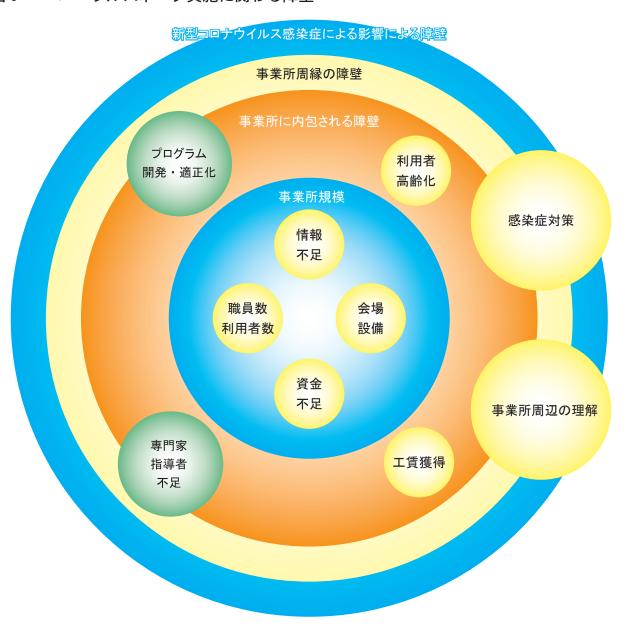
与えている。事業所の日常業務としての感染症対策の取り組みには、人的、物理的、資金的な過重な 負担を与えている。感染者が発生した事業所では、職員が減る中で対策に追われる。昨年、ニュース で何度も流れた事柄である。日常活動以外への取り組みを妨げる大きな障壁だろう。

感染症対策が安全性が高く安心していただけるということを、きちんとアピールし理解を共有していく ことが活動再開の前提となるだろう。

## 事業所周辺の理解

「3密の回避」は「ふれあい」を重要視してきた福祉活動にとって、両立しづらい事柄であり、多くの活動・行事が中止に至っている。また、各種の活動再開については、利用者の保護者や地域の理解が前提となるだろう。

## 図 9 ユニバーサルスポーツ実施に関わる障壁



## 第2節 障壁を取り除くための提言

前項で抽出した障壁を取り除くために、さまざまな視点での対策があると考えられる。障害福祉サービス事業所の事業所は、障害福祉サービス以外の事柄も担っている場面が多く、職員の担う仕事量もますます増えていくばかりと考えられる。

今回の調査の結果として、事業所の負担があまり増えない形で、スポーツとりわけユニバーサルスポーツへの取り組みを増やしていくために、当基金として取り組むことができる、対応策を提示しまとめとしたい。

## (1) 既存のネットワークへの情報提供

地域における福祉関係の事業所・団体には既存のネットワークがあることが一般的だろう。ユニバー サルスポーツの考え方や意義を、定期的に情報発信をし、意識の向上を目指すことはどうだろう。

情報発信の前提として、下記にあげたメニューを充実させ、小規模な事業所でも取り組みやすい事柄、 事業所内ではじめられる事柄を紹介し、次のステップへの足掛かりとして、今後当基金のニュースレター を配信することは実施できる事柄だろう。

## (2) 多様なスポーツ指導者や専門家への情報発信

一方で、スポーツの指導者・専門家に対する情報発信も重要だろう。障害者スポーツに取り組んでいるスポーツ指導者や専門家が少ない中で、少しでも理解者を広げていく活動は有意義ではないか。 上記、地域における既存のネットワークへの情報発信と同様に、定期的に取り組みの様子や、スポーツに対する障害福祉サービス事業所のニーズを発していくことは実施可能な事柄だろう。

## (3) 事業所の特性に配慮をしたコーディネーターの発掘

障害福祉サービス事業所のそれぞれの特性は、立地や障害特性、職員数や取り組める時間帯など、まったく個別で、一般化することは難しい内容と考えられる。それぞれ個別の運動プログラムを提供するにあたり、情報を整理しメニュー化する役割を担うコーディネーターがいたら、適応できる運動やスポーツが増え、定着するのではないか。提供するプログラムを固定的に考えず、事業所に適合させながら提供できればニーズは高いと思われる。

この調査に関わっていただいた専門家のみなさんは、それぞれスポーツにおけるネットワークの主要な 位置におられる。相談をしながら、提供可能かどうかについて検討を進めたい。

#### (4) 小規模事業所でも継続して取り組めるメニューの提供

提供するメニューのなかでも、とりわけ取り組みが難しい、小規模事業所に対するメニューは充実しなければ、個別のメニューを適合させることは難しいだろう。狭い場所、短い時間、準備があまり必要とならないメニューの開発は難しいことと思うが、次年度以降のこの研究会の中で検討を進めたい。

#### (5) 高齢化に適合したメニューの提供

前項と同様に高齢の方に提供するメニューの充実も不可欠だろう。今回の調査メンバーである林田は るみさんは、エアロビックを高齢者に向けて適合させた「スローエアロビック」に詳しい。運動強度は落 としながらも、健康維持のための必要な運動として、全国各地で定着を始めている。この他にも健康維 持に必要な高齢者でも適合できるスポーツのメニュー提供を検討していきたい。

日本エアロビック連盟「スローエアロビック」 https://www.aerobic.or.jp/slowaerobic/

## (6) 取り組みの実例を紹介する媒体の提供

それぞれの取組を紹介する、ホームページなどでの情報提供は可能な事柄だろう。障害者スポーツに特化せずに、取組の可能な体操やウォーキングなどのオンデマンド配信や、イベントにおける新型コロナウイルス感染症対策の実例など、広くニーズのある情報はあると考える。情報発信の手段として、受け手を選別することのないホームページでの配信は、意義のある取組で、実施可能な事柄であろう。

## (7) 新型コロナウイルス感染症対策を適用したプログラムの情報発信

地域で取り組んでいたスポーツ大会や運動会などのスポーツイベントを再開していくにあたり、次章で紹介する新型コロナウイルス感染症対策を意識した、当基金が行った、スポーツイベントの取組を紹介することは意義のある事柄だろう。

ユニバーサルスポーツへ当基金が取り組んでいる意味は、障害の有無になるべく影響されないプログラムの提供を通じて、差別のない社会づくりに貢献したいとの意図である。健康維持のためのスポーツや運動も重要な事柄であるが、参加し楽しみながら交流できるスポーツイベントは、共通理解をつくるために必要不可欠な事柄と考える。

まだ試作段階で瑕疵のある点も多々ある。失敗であった事柄も共有することにより、広く安全で安心な運営方法や競技内容に近づくであろう。これから、当基金が取組を進めていく中で得られた事柄について、情報を発信していくことは意義のある事柄だろう。

## オンラインによるスポーツ・運動指導の取り組み

## 林田はるみ

## 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部 教授

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、パンデミックと言われる世界的な流行となって以来、私たちの生活スタイルを一変させました。外出の自粛や社会的距離の確保など様々な対策がとられ、いずれも我々の健康を守るために不可欠なものでした。しかしその一方で、日常生活に多くの制限が生じており、中でも身体活動量への悪影響は大きいものでした。

「新しい生活様式」を実践する中で、活動量そのものの低下が引き起こす、身体的及び精神的な健康への二次的な被害も懸念されています。子供たちの活動範囲や運動の機会が制限されたり、テレワークが推進されたりすることで、日常の身体活動量が低下し、体力低下や生活習慣病の発症に繋がる可能性が考えられます。特に高齢者の場合は、身体活動量の低下によって、体力が低下するとともに認知機能を含めた生活機能全般の低下をきたすリスクが高まります。

密閉、密集、密接の3つの密を防ぎ感染拡大を防止するために、全国の運動施設や運動教室が休業や業務縮小が行われる一方で、YouTube や Zoom などのオンラインを活用した、新しい運動指導サービスが注目を集めています。



オンラインでの運動指導サービスには2種類あります。まず は指導者が運動教室をリアルタイムで配信する「同時配信」

型と、参加者が好きな時に運動することができる「オンデマンド」型です。 いずれも参加者はスマートフォンやパソコンを介して教室に参加することができます。

「同時配信」の運動教室では、対面での場合と同じように、双方向のコミュニケーションを行うことができるというのが利点です。指導者と参加者は同時に、Zoomのようなビデオ会議ソフトウェアを使用して行います。指導者と参加者が、運動中に同時に、お互いの映像と音声のやりとりを行いますので、運動している様子に合わせてコツや注意点の指導を受けることができます。また、指導者への質問や参加者同士の会話も気軽に行えるため、交流が生まれて運動継続への意欲にもつながります。「同時配信」の運動教室は、企業や指導者個人が有料で行っている場合が多いです。

一方、「オンデマンド」の運動教室では、参加者は時間や場所の制約を受けずに自分のペースで運動することができます。指導者は運動指導を動画で撮影し、様々な編集を加えて YouTube のような動画共有サービスを使用して、プログラムを配信します。参加者は、いつでもどこでも何度でも気兼ねなくその動画を見ながら運動することができます。「オンデマンド」の運動教室は企業や指導者個人が

有料で行っている場合と、YouTube などで無料で動画配信されている場合があります。

運動やスポーツに取り組むことは、健康増進だけでなく、 ストレス解消や自己免疫力を高めることにも役立ちます。これ までは、運動指導者は参加者の様子を身近で観察しながら、 対象者の体力と技術のレベルに合わせて指導を行うというの が、運動指導のスタンダードでした。しかし、オンラインを用 いての運動指導も実際に行ってみると意外なメリットに気づき ます。交通手段がなくて教室まで行けない人たちも、インター



ネットでしたら移動の手間がありません。また、子育てで時間の自由が効かない人でも気兼ねなく出入りができますし、人前では恥ずかしいという人もカメラや音声をオンオフにできるので、心理的な負担も軽減されます。もちろん、運動中のリスク管理の問題やインターネットでアクセスするという最初の難しさはありますが、オンラインで時間と空間を超えて運動を楽しむことができるようになりました。

このようなオンラインを活用した運動指導の取り組みは、企業や指導者個人だけではなく様々なスポーツ競技団体や大学でも行われています。下記に事例を紹介します。他にもたくさんありますので、ぜひチャレンジしてみてください。

スローエアロビックをやってみよう!

公益社団法人日本エアロビック連盟

https://www.aerobic.or.jp/slowaerobic/try/

HIPHOP を楽しもう

桐蔭学園トランジションセンター

https://www.toin-tc.com/post/20200809omosiroondemandhiphop

## 第5章 新型コロナウイルス感染症 対策プログラムの試行

## 第1節 実施経過

## (1) 実施目的

当基金が開催をしてきた「ふれあいのスポーツ広場」も、新型コロナウイルス感染症による影響を受け実施することが困難となった。

中止決定の後に、ある程度、新型コロナウイルス感染症が収束した後に、安全で安心な運営体制、 競技内容を検討してきた。多くの人が集い、交流していくことが大きな目的であるふれあいのスポーツ 広場は、感染症対策とは相いれない側面がある。感染症対策に沿って実施をするための要点を整理し、 それぞれに対応策を検討した。

本格的な再開を前に、より小規模で留意点を洗い出し、さらに安全で安心なものとするべく、リハーサルと題して計画をした。

## (2) 留意をした事柄

公益財団法人日本スポーツ協会が公表している、「スポーツイベントの再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」を遵守し、さらにこのプログラムの特性である、障害の有無に関わらず共に楽しみながら参加できるプログラムの精神を盛り込みながら、次の点に留意をした。

全ての参加者への健康観察の徹底 全ての参加者への感染予防対策の徹底 会場内での感染予防対策の徹底 いわゆる3密回避の為の入場や着席場所の指定、プログラムの開発

## 第2節 開催概要

新型コロナウイルス感染拡大にともなって、新生活ルールが定着されつつある中、3密を避けながら 安全に事業を行う必要性が生じ、モデルプログラムとして試行した。

## (1) 実施体制

事業名 「仙台リハーサル大会~コロナ禍におけるユニバーサルスポーツの開発~」

日程 2020年11月30日

会場 元気フィールド仙台

主催 全日本自動車産業労働組合総連合会 / 公益財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金

協力 日本福祉大学 / 仙台ユニバーサルスポーツ研究会 / 社会福祉法人なのはな会

## (2) スケジュール

10:25 入場

10:35 大会スタート

新型コロナ感染防止対策に関する説明

※競技の合間にアルコール手指消毒タイム

10:40 準備体操 ラジオ体操

10:45 第1競技 ミラーリング

11:10 第2競技 移動玉入れ

11:15 第3競技 コミュニュケーションパス回し

11:40 退場

※司会/日本福祉大学スポーツ科学部助教 兒玉 友

## (3) 参加者

参加施設:社会福祉法人なのはな会「はまゆう」28 名

社会福祉法人なのはな会「はまなす苑」11名

運営スタッフ・医療関係者 計:18 名

参加者合計 57 名

## 第3節 実施内容

専門家の意見を踏まえて新生活ルールに適用できる非接触なプログラムを3競技実施し、競技のみならず運営面全般においても新型コロナウイルス感染症対策を競技前から準備し、安心安全な大会運営を試行した。

## (1) 競技

①第1競技 ミラーリング

1回戦は、先頭の人が、後ろを向いて立って、天井に向かって片手でグーパンチをする。2 番目に座っている人も、同じ動作を繰り返して、後ろの人に伝えていくプログラム。最後尾 の人だけ、両拳を上げ、早く上げた列が勝ち。2回戦は1回戦と動作は一緒で、最後尾まで繰り返し、最後尾の人がグーパンチをした後、座る。その後、先頭の人まで順番に座っていき、最後は、先頭の人が座った後、両拳を上げる。3回戦は、先頭の人が、椅子の周りを一周してから、1回戦と同じ動作を繰り返す。

#### ②第2競技 移動玉入れ

1 列ずつ順番に、赤か白の風船を防球フェンスで囲った的に投げていく。的の中に多く風船 を投げた方が勝ち。

## ③第3競技 コミュニュケーションパス回し

全員で1つの大風船を落とさずにパスを回せるか、その風船をついた回数で競い合うプログラム。参加施設ごとに円になったレイアウトで実施。

#### (2) 感染症対策

- ①競技前に実施した感染症対策
- ・到着後、参加施設ごとに出発前の体温の確認と体育館入口のサーモカメラで検温実施
- ・参加者全員にハンドタイプのアルコール手指消毒及びマスクの配布 (参加施設ごとにアルコールジェルも用意)
- ・参加者全員に水分補給用の水を配布し、密になりやすい自動販売機利用の回避
- ・参加者用Tシャツの事前送付による、密になりやすい更衣室利用の回避
- ・参加をご遠慮していただく方や当日の感染防止対策についての詳細な注意事項の事前送付

#### ②競技中に実施した感染症対策

- ・参加者全員分の椅子を配置し、密にならない着席型の会場レイアウト
- ・椅子と椅子との間隔を1.5m確保したソーシャルディスタンスの徹底
- ・競技用具(風船等)の共用を廃止
- ・体育館との連携による定期的な換気
- ・アルコール手指消毒タイムを設定

## 第4節 要点と課題

## 「コロナ禍におけるユニバーサルスポーツの開発〜仙台リハーサル大会の実践事例〜」

## 兒玉 友

## 日本福祉大学スポーツ科学部助教

昨今の新型コロナウイルス感染拡大にともない、スポーツ現場では、3 密を避けながら安全に事業を 行うことに配慮した様々な工夫が求められています。前回のニュースレターでは、コロナ禍におけるユニ バーサルスポーツの開発として、仙台リハーサル大会で実施した3 つのプログラムを紹介しました。今 回は、3 密を避けつつ交流が図られるよう配慮した大会プログラムのポイントを紹介します。さらに、実 施後に見えてきた課題や改善点をもとに、いかにして大会の目的を保持するか、その要点について述 べたいと思います。

## 【事業の目的】

ふれあいのスポーツ広場では、障害の有無に関わらず誰でも楽しく参加できる「ユニバーサルスポーツ」を行っています。「ユニバーサルスポーツ」は、①ルールに柔軟性があり、様々な人の参加が可能である②勝ち負けのあるスポーツの場合、だれにでも勝つチャンスがある③ルールがシンプルで誰でも

が理解しやすい④身体的な負担が少なく、 安全性が確保されているなどの特徴が挙 げられます。本事業では、組合員が実行 委員として参加し、障害のある方々とユニ バーサルスポーツを通じてふれあいを深 める中から「自立と思いやりの心」を育 むことを目的としています。



## 【プログラム内容】

仙台リハーサル大会で実施したユニバー

サルスポーツ体験は、①「ミラーリング」と②「移動玉入れ」③「コミュニュケーションパス回し」です。①「ミラーリング」は、縦1列に5名程度が並び、前の人の動作や姿勢を真似していきます。最後

の人はポーズを決め、順位を競います。 片手や両手でグーパンチ、椅子の周りを 一周して座るなど、シンプルな動作を取り 入れました。目と目を合わせて動作を真 似ることから、コミュニケーションを図るこ とを目的として行いました。大会後、参加 者から「少し難しい」「サポートが必要」 などといった声がありました。スタッフから も、「参加者が戸惑う場面がみられた」「勝





敗が分かりにくい」との意見がありました。 改善点として、司会者の動きを参加者全 員が真似る、旗揚げなどシンプルで見て 分かる道具を取り入れて行うなどが挙げら れました。

②「移動玉入れ」は、防球フェンスで囲った的に風船を投げ入れ、多く入った方が勝ちとなります。密を避けるため、前の列から順番に風船を投げ入れ、投げ終わっ

たら後ろに移動します。的をめがけて「せーの」といったかけ声や、的に入ったときに参加者とスタッフが一体となって拍手で盛り上がる場面が多くみられました。参加者からは「楽しかった」「風船が入って嬉しかった」といった声がありました。しかし、車いすを使用している人にとっては、風船が的に届かない、投げ終わったあとの移動が困難であったことから、投げる位置や移動方法の再検討が必要であることが分かりました。

③「コミュニュケーションパス回し」は、全員で1つの大風船を落とさずにパスを行い、風船をついた回数を競います。椅子を内側に向けて円を作り、円の中央と外側にスタッフを配置し、風船が落ちないようサポートを行いました。得点板を使用し、点数をめくりながらカウントしました。チーム全体で協力して行うことで一体感がうまれていました。途中、椅子から立ち上がらないよう声をかけましたが、回数を重ねるごとに、立ち上がる参加者が多くみられました。また、夢中で風船を追いかけ、いすから転倒しそうになる場面もみられました。改善点として、より安全に行うため、椅子に座らず立位の状態で行うこと、常にソーシャルディスタンスが保たれる配置を行うなどの工夫が考えられます。

## 第5節 要点と課題

様々な感染予防対策を講じながら実施した仙台リハーサル大会であったが、課題を抽出するために、 要点を整理する。その際、場面ごとに分け、想定していたことと実際に試行したこととの乖離を明確にし ながら課題を浮き彫りにする。

## (1) 事前準備~当日検温

開催当日、密になる可能性を排除するための方策として、更衣室利用をなくすための事前 T シャツ 送付や、当日スムーズに主催者と参加者が連携をとるために、詳細な注意事項の事前送付、そして到 着後の朝一番の検温を確実に実施するために、駐車場到着後の連携等の対策を実施した。

当日朝一番の検温は、駐車場内で実施予定であったが、車内の気温が体温に反映されてしまい、急 遽体育館入口での検温に変更した。また駐車場での連携も想定どおりでなかった。

以上の点から、参加者の検温のタイミング及び駐車場の密の回避による誘導は、今後の課題としてあげられる。それらの改善策は一義的でなく、体育館の入口やロビー等の構造、体育館と駐車場の配置の問題、参加施設数の多少、それらの要因に照らし合わせて、より安全安心でかつ滞りなく主催者と参加者が連携できる方法を探っていくことが近道といえる。

## (2) 入退場

密を避けるには、1施設ずつ順番に入退場を行うことが必須となる。また、体育館入退場時には靴のはきかえを行うために、その時間を十分に確保した誘導体制が同じく必須といえる。

今回のように少ない参加2施設でも、靴のはきかえで時間を要し、密回避のための方策が必要だと感じさせた。

また、退場時は各施設の準備にかかる時間がまちまちであり、原則は入退場口から隣接した参加施設を先頭にするが、柔軟な対応で密の回避を行うことが望ましいだろう。

感染対策の柱となる三密回避の徹底を考えるならば、入退場口数に応じて参加施設の入退場を分けることが最善だろう。その数も限りがあるので、靴のはきかえを着席で実施するための会場設営も検討すべきだろう。

いずれにせよ、体育館の構造と参加施設数の多少にマッチした入退場の方法を模索していくことが課題といえる。

## (3) プログラム実施中

プログラム中は、参加者全員分のハンドタイプのアルコール手指消毒と参加施設用には、さらにボトル型のアルコールジェルを用意し、感染対策を実施した。

競技の合間のアルコール消毒タイムで、参加施設はハンドタイプを使用せずに、ボトル型アルコールジェルで職員から利用者に消毒を実施していたことが大半であった。

競技サポートで動き回ることが多い実行委員にはハンドタイプ、参加施設全員が効率的に消毒できるボトル型と、確実に消毒する方法を考慮することが肝要であろう。

今回は少ない参加施設のため、アルコール消毒の実施の確認を容易に行えたが、こまめな手指を実施するための時間設定にも、注意すべきだろう。競技と競技の合間に確実に時間を設け、各施設ごとに各担当者を配置するといった人員体制と時間設定が今後の課題となる。

会場レイアウトに関しては、着席場所を指定して実施した。ソーシャルディスタンスを確実に確保する

ために、着席場所と場所の間隔を1.5 mずつ離れて設営し、他の参加施設との距離は5m以上を基準とした。3密回避という大原則の中でのプログラム作りおいて、着席指定型を採用した方法は、常時ソーシャルディスタンスが保たれ、一定の成果をあげたと感じる。ただし、第2競技と第3競技のように、最初の指定した場所から移動して、ソーシャルディスタンスを確保することは容易でなかった。移動を伴う競技中のソーシャルディスタンスは、課題といえる。サポート体制を充実させるなり、(4) にも触れるが、内容そのものを移動が出来るだけ少なくするプログラムにするかが課題となる。

次に、プログラムは着席型のため、プログラム中の移動は主にトイレ時のみとなる。今回はプログラム 開始前にトイレを事前に済ませておくことを原則としていたが、それでもトイレ使用は避けられるものでは ない。

トイレ誘導の人員配置と意識付け、そして他施設担当者との連携が今後課題となる。また、体育館内のトイレの個数に応じて参加施設を対応するといった、個々の状況も考慮するべきだろう。

## (4) プログラムの内容

感染対策に主眼を置きつつ実施した3競技であった。

競技内容や感想等は、前節で詳細に記されているので割愛するので、ここでは感染対策という観点で要点を整理する。

まず、第2競技と第3競技時の移動というのは、密になりやすい要因だろう。

第2競技は、最終的には全員が一列目に順番に移動し、元の位置に戻るというプロセスなので、個々の移動時間に変動があり、誘導する側も、誘導される側も、予測して接触をさけることが難しい。

一方で、第3競技の移動は、プログラム開始前に一斉に円になるように移動するため、予測がつきやすく、接触を避けやすい。

以上の点から、移動しないプログラムが最も感染対策を実施しやすいのは明白だが、移動するプロセスを経たプログラムでも、参加者とサポート側双方が密にならない対策を講じる手立てを検討していくことが課題となる。

また、第1競技のように、着席した場所から立ったりポーズをとるなど、移動を伴わないプログラムにおいては、本来の障害の有無にかかわらずともに楽しむという精神に沿うかが課題となる。